へ 5
4411

へ5
4411

繼穂集

人の(?)字をは五もじ七もじに思ひをのへ大和
うたは三十一文字にかぎりて俳諧八十七
文字にして俳諧季移のうちより明集を得る業
古き去来拾ひの本をおもひかりて其の余情を尚おもき
其さる毎露めける月の光るに似て短きをあつめて
様(?)の葉く句へるを出しこれをとりて集乃
名付繼穂集といへるなり

天保[illegible]年菊月清水(?)

一樓

門 へ 5
4411
號巻

昭和九年九月二五日
購求

梅室

字まく飛石の泥まで隠す柳哉　梅室
嵩くらる水にうゆる陽炎　一楼
交代の諸侯も爰に細かて　手木
菜種ありけ海くらく　する　室
席ひろう儀ハ彭る朔の月　楼
中くなけ出て絵一枚　木
旧蔵も孫にうらもおれし節を　室
櫻の木ほめて古咄しきく　楼
奈取の挑りいろく精もなし　木
出て名残の芥見えりける　室

けふハあふ人まんまかぬ律いなり　楼
出居家うふ清く晴天　木
海国の付し波も月明て　室
ちんえ翁にに崖まく　楼
貧加減たましたちとわらけり　木
先摘数に茶くほしらす　室
苗取るも気めて家きる深芋　楼
来風に吹かう雑乃ゆて錯　木
株源と殺先にゆく日影永さ　室
軒下銘巾もかくす癖あと　楼
ミ形さほくそね木揚屋へまるる　木
さりあしくれ枕ありけ出す　楼

ゆふ出すかな炭焼麦の色床のゆへ　室
霧籠したる羽箒乃町　木
余遠ひら播きくれ八を振廻し　楼
料理ふ行も醫者乃参物　室
襟かけの絹袷すそき洗足場　木
行出すまゝ月乃　鋒　楼
秋出も秋よ来るとてすゞし　室
古のうわさも盃の宴升　木
花の縁伊勢の陣も下げれ　楼
奇麗すきこと年の暮しまぬ　室
晩くはり碁打けれ家居賦き　木
拾ふてふれ年出中原屋吹　楼

ちるはなの掃も乃りつくすかなと　室
人とちやんて宿を出る蛇　木

梅室　一楼　禾木
各十二句

雪掃た町へ流し名月の月　一楼
秋をまて来やしまて七種乃声　禾木
東方桐ふ霧まれと芸能ふ添　梅室
ときわりの猫ふとうり葬あり　楼
善用行毎はあちね初しく職　木
年夜出くは方はつくくふる　室
栋梁乃ふれ薬業ての由細工小屋　楼

木綿の袖にあすするのけしき哉　木
猿でも畏をつまぐるわらの乗像　室
七夕は勝り團扇おもする哉　樵
来つきの乃むすへあらき峯の月　木
山織をかけ　通りゃ　よく丁　室
衣らり名をあゆとやりの事をかし　樵
買ふとらりえみり足　誌請らく　木
三井寺能嵩の慕ら苦をそむいて　室
業らり　けしきる　佐の曲寮　樵
晴かゝ呈しるる　の都乃　雨　木
世あもしかき　家りる席まん　室
汲みりらけらめる麻羽織　木

あ袍て奇麗な　松ぷる井　樵
もろき見れは火姿子似らてそ　室
覗きて　髪の　らりんね汗るき　木
常あり嫁しら抜男のかけ　樵
東五六冊えたりすり　儀々哉　室
猩猩乃語ぬらにきる上より口　木
雀あらりし生飯（サバ）りあらめまる　樵
直の安んれ根の木そ知り妻むし　室
十里わ声へあまりて口利キ　木
盆の月天龍川のあらりて沙汰　樵
嗅でつき出す江戸の塩魄　室
帷子の布ともひきさす袴あふし　木

千木かつ日本の光る含も秋　梅
貝ふけたあつまりかへる　備士　室
船より舟より呼ずす　高聲　木
花乃雲ふ房をととれい　松針　梅
雷てはしハ　まれ所く　室
一楼　木　梅室
各十二句
折々梅折て出まま夜はれ家　禾木
日の静はり帰すえる　学　梅室
新春を出負来も穂有来て　一楼
を雑賤の末ありけり　筆有り　木

闌引を早追あるの夢於月　室
唐玉見るき綿於　ふく青　楼
あわくして矢井まより　塩ずれる　木
信人志うて子をさつ麦る　室
石町の積と中さえ為つうし紀　楼
かはく生けたる小割　盟符　木
瓦あく風花へて何於年中すれ　楼
時鳥すた似ぬあるかふ　句　室
盆居らず九月一夜の月の秋　木
なととよいくる　猫　つ家なり　楼
手あそり八雑すち出来る叫子曳　室
出綿明の池あらなる　木

停止札菊に木の香りかくれんぼ　室
毎日のやく余所の嬉　樵
疑ひも蚕も人も笑ふんよそ　木
酒塩のんで去年いまだ足ほ　室
組乃法ぞ割らせる艶眉　樵
若すまじき外秋の庵　木
撒ちより桐油の雫たりたり　室
逆掛と秋は月もちひさし　樵
秋の若手より柿薪尽き　木
二度と三度と逢ふきさめする　室
似合ふる藤の芋腹なき遠ひ　樵
糸帛宇宙すり更科の月　室

西あたり米粉り色つく風に吹　木
山雀飛んで木部やから出る　樵
村ずまさぬれもいはぬ古き鞍　室
有難がりてもらひし大判　木
麻ふくれ持て箇蔵を買出す　樵
髪八扶結に後髷を思く　室
菊咲て多かく湊も去ありけり　木
わさきはけのりも橋の笹鐘　樵

釆木　梅室　一樵

各十二句

梅をりに出て見れば春霧降る　蒼虬

梅一度まして例よりさらに多り　老白
門弟へ覚えて梅が花　月座
川越に芸も咲けり宗鑑の子孫　風也
関に来てさへつるや梅の折えだ　十海
梅折て行きもかしら水　巴陵
風呂の中のまはしけり日和や梅の茶　粗文
二階から手折りてもらう梅が花　舜齢
あしらひて竹や梅の梅　之枝
梅枝手折り行けて梅見る　宜州
お僧乃口よかし宗鑑の花　素白
何がな来て来る梅の茶　雪篁
葎にも清き梅乃風　安中

梅の茶　少年　直吉
ありあけて鶯鳴やらぬ山　湖山
鶯や軒戸されて見るかす　桐雨
宇治の初音す中で啼かず　西月
菫にも覚え津らひ乃啼　涼谷
鶯や啼あらので啼　禾紫
うぐひすの声より日暮れかな　五済
鳴きもかくけり　蕎少
起されて起てまし　平出
茶の中にも洗ひ茶　白桂
ちや人乃摘さあ若菜　子行
只の葉の中で摘むわかな　可门

有ゆうハ名をあらハして菜葉かな　三蔦
残りきの茶小ぬ出たちや小松虫　楓下
山鳥ハおあまり子持の雲雀かな　貨僕
鳴きやむも小橋あたりし春構　林曹
一里出る様行清す加青柳　秀外
桜柳ちかれ出来そうありけり　蔦洞
菜の千代に着られて梅の花かな　久藏
夕暮に湯つれて十日の柳かな　丁知
耕る哉を新手す柳かな　寿坐
能くり様人なる柳しすかな　之桂
涼雛やまんまう於な足のかけ　駿鳥
漣りけや無てとありける春の雨　雲子

鳴出すの暖かて志れずさいさつま　赤守
鶯やふらやましきまの手のかへ出し　露谷
菜猫のむくら和れしてわられけり　青可
恋猫乃本ふに七下りて逢ひすけり　在渕
おそろしき恋に步行る男猫かな　敬斎
とまりの七尾なる沙法や猫の恋　学笠
五六日隔てはじめて友鳥なる　菊所
雪の来て隔日も暮れと来乃為　江月
来の雲枝直しては晴れもあり　東一
谷しておひ弟遠のや雉子の声　比古
雉子鳴や松すらうも峯の夕さり　餃雪
啼ての高み入出るや朝乃雉子　岱年

尾も頭も浮き出て松らしく河水　扇和
雲雀鳴ほとりして去るや松の花　松什
出替りて来て米むさぼりに　幽篁
花あるや舞鶴の月は水　梅通
人声の遠ざかりも春の前　福米
ひとつある戸口に霞む波のをち　春圃
更てゆく月待あり水はをと　白兎
一筋に香ひ鰭や待月　浪文
何となくさむらひの裏の月　無一
乙鳥や待人もわたる粟田口　一貝
としつもりてもなかなか斎ひ雀　斗圃
又年のくれにはしらむ魚哉　呼牛

引返す潮にいかつき雲雀哉　所大
ちる付ありて梢さき樗哉　春騏
咲かゝり花かたる一つ紅の　松五
初時雨や浮ふ合のよき塀の内　碓嶺
蕗の葉のこしかたの月かけり　文帒
春の野を伸上けしや芦の角　萬里
声のありし漆やもの　護物
夜にさかれてもぬる秋の水　青圃
まくらに水も氷りてのむ夜　今是
初手の雨ねたまれ庵さき　東平
まつ手のし初秋の赤き糸　古春
草むらや出てまつ夜もうすき戸口かな　芦川

菜の花の末やありし婿入馬　奠山
桜木すゝ月ごろま似さうなり　英山
魚川岸静つまましみけ花の風　春路
春風や男女の行すがた　雨堂
桜狩しも跡かゝ岩も凡巾　一肯
山影水ゆるみ初むれる手柄かな　祇白
西行の月ものかり香鵜理人　小圃
華やかにして虜もさす月かな　慈覚
二階から世いし汲平芽　得蕉
とゝ鳥や家の遠くも走りかな　素立
蹄の紫たく桁や日のなき　都柳
上敷をとめつて掃し桃の花　黄山

出代のあとつゝし桜木履卦　松祥
山吹や芽あけて又一ときしさ　千輅
月はまだ雲ていつかし称桜　渓斎
山桜の雲の上まで折り桜かな　柏樹
折得てゆき来しそうの消ゆ花　棧車
幸はなれしはりふり山はさくらかな　砺山
見えかねる客も桜乃頭より　一蔦
人勝の出来て乾くる男可笑　百慈
菜の花し花壇の中の出て消る　沙路
こゝれかけの花を開ける折汲手かな　左樗
菜桜に名のりて散りし芳野山　米田傳四郎
秋し水の中や初青の蜀魂　茂椎

聯すしりて社乃春かな寸　惟草
去年まで義て旅路の弦をぬき　卦龍
後家さへ清いてまもるや不義の家　荷了
後家をも人の惚よつく山家かな　石戟
置捨の手燭あかりやけしの花　銭兄
ちんまりと立田の紅葉かな　麻交
和しの若手輩ふ麻の冬のみ第　亀得
指代てやまさ四五日の花ゟ那　抱筏
日はそりのぬけぬ旅や院の売　幻芝
心の尾もい冬智者初手まで百合の花　孫山
たま口やし持あまて入梅の高位し　青岐
心ぞかくしたも沸しき餞哉　孤来

涼つくまで申ぬ立の淵の来りし哉　小篆
都気をすまする妙て来しかんこてり　歹蘇
縦うし出て人まちしやまの月　卓洲
虎せ帰ま帯ける家も飛ある　古馨
叩くはえもありさまや氷影哉　振々
常も夏まで植替て少たの渡りし心　文洲
さかえられてあ今中ある人の墨哉　呈谷
何ぬ看ていさぬ替るや手縫　薪紀
常例の楽めでたし鮓汁　雪鱼
さきかりし来て心かりすみ貴　不及
賣を龍ても雨ぬ銭来りけり　貫魚
涼て真しく若くり候草祢　太峯

六月廿日[illegible]は氣味[illegible]　双烏
秋[illegible]のりく[illegible]井戸　自楽
水仕場[illegible]星[illegible]　烏律
乳のまし[illegible]踊り子　野巣
鶉[illegible]　萬比
[illegible]花も[illegible]の秋　一蕙
新酒の[illegible]　大笘
[illegible]又[illegible]は の[illegible]　千崖
[illegible]　眉岳
[illegible]の[illegible]　謝堂
[illegible]は[illegible]　史千
[illegible]の[illegible]　樵堂

野の[illegible]有明よ　俵瓜
蜻蛉や[illegible]て通る[illegible]の先　暉漣
[illegible]有[illegible]に見ゆる[illegible]　三番
[illegible]　栞斎
[illegible]青[illegible]　肯台
[illegible]　呂明
八月や[illegible]日の[illegible]　松呂
[illegible]月[illegible]川[illegible]　大巣
[illegible]の[illegible]　多よ女
西風[illegible]月　篁露
更[illegible]山[illegible]月　流芝
山の月[illegible]　楳狸

月は雲かつてかくそ庭の萩　雲響

ゆりけむ五器にたらぬ花さかり　有丹

足てさへ宿はあつものまつ秋しし　若美

子てわるゝ月のみなれるや猿の声　可一

陸くを庭に入れり菊の人かり哉　よし香

田つ散をしぬ木葉あり草の本　丹叢

ゆしくれ[illegible]の又[illegible]　里都女

葉室[illegible]木の葉ひろり初冬　里竹

中秋[illegible]　野陽

二日ふり霜[illegible]小付雨　點巣

俵[illegible]細手花さし[illegible]　蘇竜

[illegible]　蓬宇

東る岩の人も探らぬ[illegible]　蘭所

一羽二羽すゝりぬ[illegible]　三岳

あき波のむら[illegible]　大素

庭の花[illegible]屏の閑[illegible]　昇左

[illegible]　恭里

[illegible]　五讃

[illegible]　柳絮

[illegible]　雨什

[illegible]　而后

[illegible]　遅流

冬[illegible]篭　阜郎

何事の[illegible]氷[illegible]　休圃

大なみ押て行あまりかゝりたつ　三省
つゝきはひらて黒船とゞまりぬ　曽夢
時雨降すおもし帯をゆるめけり　徐全
蓮かれて身まかりし切の大根哉　茶静
我鏡そこへかゝる紅葉のちる木藤哉　曽見
はしゆかれて行末けふりぬるゝぬる　應々
枯尾花旅の寝さめる見舞けり　畝古
二着も一味もつや霜林のほう　可布
起てかきみつ氷の解けり　梧鳥
麦蒔やてるやくらやか小鍋汁　氷角
大根ふきて日のあたらむまで月のあり　墨巣
打鈍のこま板えをそふさとけ　夢蝶

二親もやさあり家ぐし梅ころけ　青路
儀ゆ町に蔵あたゝけの都藤哉　斗遊
椿葉色ことなもの生乃相にある　四明
梅板にすゑる火桶哉　春帯
我ゆ底や儀の末まぬ桜螢　米牙
京にもしの船ゆ飛ゆ鶴にゆ家　一嘯
木の葉にもふきて雀の哉　叢
彩る〜やあんの鏡る立かなり　斜道
雲ふみ千鳥起さらあるし蕾　一夢
わかれ松の蔭にすゝや雪の雪　鳥銭
こゝろをきて見るし梅にたひらき　南涛
桜経済しそのふりけり笠の上　大梅

大寺や花追つめし寺の犬　鹿太

いさゝかし佛に花や寒に入　茶田

かけ鮭をひろげかゝる庵の郷　一兆

大三十日浪子ありいてとかきけり　西馬

追加

文音往来の俳仙　一楼

閑の子斎月乃子來まちけり

砂も尾花を咲きる塵　小圃

ひとつ木細の人あり物責て　桐雨

盤乃夜に川ゝぬけ折り　楼

呂を之手折らへ拙ふ春寒さ　圃

咲きまじて梅あり篝あし　雨

白猫のひろく銀なさす窓夜　楼

いりかゝまりさ綿りの簾かな　圃

清れあひま乗られて昼の服連き　雨

纏くけ春つゝ日よみも哉き　く　楼

研つける手管をぬらす 絶 屑 圓
水菓 おりて 曲る 錦 段 兩
一件るはしきんて隠る なるの 肩 樣
弱き 角力乃 酒よりよつて家 圓
借金しても志らず羽おりの縫巻て 兩
錦 繍ひの 多い さい 日 樣
咲かされ 茶も 掃ぬ 笑顔のうけ 圓
的なし 屁りに 雑子を 称まなり 兩
家 仕よる 稲荷の 幟 流させて 樣
いれの 濃きる 菜の はひ 花 圓
未練乃 果かな 見きて 称まり 兩
屁をなりの まて 振る はく 虫 樣

ひとり 奥方の 仕 様て 帰る 圓
椰 おいひ 落る 柿本 の 申 子 兩
何うさの 慶しも 志まぬ 印の もさ 樣
火 葬 なして りかり その 立 圓
爺 婆 も 元 を 紀 きえこひ 合 兩
両 目 も なかく 風 乃 浮それひ 樣
様 望の 川 瀬 深く おもおり 圓
因 なれ 家 振りて 鶴の かり 甘 兩
総 合 ありて 瀬乃 縁を 出し 樣
あさま 豆 腐 汁 から と 汁 圓
呈 蓬さ 籬 おもひかずり 底 兩
喰して 呼た 手 生 の 気 体 樣

花のみ古 行き去す きのしく　圃
ちりぬくらきも 恐ろしきく　雨

其二

春はなる声もいかにいかり　桐雨
出しくあるよ 扱る 裙は火　一株
雲おりし襷にかける縄きりて　小圃
春のこゑは 噂に我門のうへ　雨
氣はつらぬ 雁に 秋さき見え月　株
二百十日を 持ずして 見る　圃
新綿の出来を 呼ぶく 志貫　雨

女房の縁て ふゐる 乞ろき　株
鋳掛り 備あるつて 無心 泣　圃
あく海を つる船の たらゐひ　雨
引潮の 十夜付する 鉦の音　株
樹蔭祭る 霧乃 はつかし　圃
豆の緑 初雁 大根の 種まく　雨
講は 隠れを 賑ふ さゝむ　株
後のうつ 爲見るての月ゆゑ　圃
牡丹なり あつて 賑る 所化とも　雨
升算 茶の濃きはうり 出す　株
畠の 番りに 因 襟 帰之　圃
背たく 雑子 越え出子 害うりて　雨

かし路絶乃青くなり　むらむらく　楳
ほうらまへりもえてうきも江戸隣輪　園
内海や宮をも通す　門庵　雨
鳴りよかさ破鼻梅行に風あれる　楳
寒しくて　かゝる集乃　丁ねけ　園
鮎ふなもよしね簀網をよすわり込　雨
戸らんて猿みすたねむ地震諸　楳
重かけた孫妻ハ持勝て出つらん　園
嗅笠屋あらむ格子戸の先　雨
新造の出初る竃うちむ月乃雨　楳
ひとかりしぐる旅　給ちり菊る　園
本所停や神の杜くちもをとりて　雨

伊勢さく馬をかへく人妻　楳
焼味噌餅捨て鍋を吹らし　園
降りふ浸みさゝり擂ぬ鳴六ツ　雨
種らんの茶の木新宿に出らんくて　楳
らんたり犇く播ふ乃篭　園

山桜静かは篝の似合けり　一楳
罷りからぬ穏し　五形新細　梅室
旅のとうる漁藤の藤乃巻られて　楳
うきめつらしと宮寝紙とる　宗
大綱の掴みはなりて串すり　楳

まけつくる我賭はあまりこそ　宝
彼岸参りは日切て刻む石佛　楼
いはゞ車もとゞける星町　宝
二俣の橋おろして杉もあり　楼
正道人乃烏帽子若く見ゆる　宝
片ゆがみては傘かけける舟の中　楼
金入あけて見まほしあさき　宝
一声あれ秋の風つく宝市　楼
いろふ鳥も夜中なりけり　月　宝
草路葉る端るけて衰けり　楼
夜往れる承て白傍に来る　宝
枕もとり穀俵おく家ハあまりなり　楼

海苔やといふて手宝の川　宝
つゞらはさ葉をかけて衣やすし　令
ふるひ見に似きぬかけ芋　楼
錦あるよう献ひふさ竹椿　宝
杉坂莟もよし花ならず　楼
あまりの臣と纏めて浅ぐみ　宝
ち提乃様から描松塩出す　楼
幸若して誘ひれし錆る又破る　宝
侭あらねは案内もなく人の事　楼
大宮に有見俄ずそはくたれ　宝
縫ひの笈ていまさとひつく　楼
小僧なれ若き秋つく　宝

くらかき坂をむかふ風ふく　梅
そこらして立揚ぶらん足たゆさ　室
法さし松由乃せきらん暮合　梅
あきさき雲霞桐伸をむす青　室
錦枯て行荒木戸乃たそ郷　梅
菓りあらし吹乱て堤のかきり立　室
打かり三尺すり謹んてかり　茅

菊似首尾

十五夜されてかや梨あり新さらふ　梅室
山雀ためりいらすり帰らぬ　一梅

春秋迎も暖盆乃僧ゑんびて　令
千年ま川仲麻こえる夕月　室
忘ひもきぬ科衣にうちなさそ　令
おんなもうるも菜の葉乃虫　梅
入れもつぬ待楼の紫積て　令
さし絲まりの豊日いららつとり　室
龍のもんの髪に柳桜の茸隠され　梅
年経してたき虎れうたへ香る　宮
送り葉早や若紫に山紀て　令
除生聞きかり淋しさ睨みなり　茅

天保五甲午季春

萬花集之序

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

於加賀寓居　梅室書

早稲田大學圖書

花は實の實ふのむかしの葉乃をれしのち花弁
つもるはたゝすむまゝに尽きぬ秋の
小枝に乱れ落ちて散りゆく宿の霜枯し
うつりゆくを名残なしと菊乃はなさかりけるに
感するにたえかねつ紀の大材ともあらはれゆく
遠津にて共につらなりかれとともにはたらく
能去人の種弁をも探り得て今にと嘆しき
華麗撰ひその先生著に家の考案を忘れ

天保丙申仲冬

梅室

一日の春雨にたえなき霜ゆくしき 悠く
梅つけ川乃雉なく人声 宜
峠の晃きゝにさらぬ頃なりけ 得
手に海茶輪飯篇をゆり春 宜
梅露の実深くと菊乃月 悠
梅かゝ咲乃むかしる腰うけ 宜
も梅もやゝあさひさぬ冬く 得
梅十海飯のふに来て春来 宜
笠屋すゝ發待ア家の春たゝく 悠
春は花乱る入梅乃つる蓋を

侍出紀よりおりくされと以そら様　宗
御者りも遊し給の中日も　悠
漢椒乃御影をみれハ月の素　宗
お撲の礼も下馬札乃結　悠
髭まで剃る小革の井へおりこそ　宗
てる出る紺人ありとらすべる　悠
無さた名館の為ゆる花乃露　宗
心まめ茶も其まゝ芸　悠
焼鉢の和らりて夫ゝ外も来る　、
おちつく名紙ハ金覧見　宗
十日待る西きて宗かもの入　悠
月算あまりて無紙まわる　宗

情けつくせる笛も出すひまり　悠
吹けもりおらふ手をみもる升　宗
蝶またの冴てれ始る中おり詩り　悠
尾をけ火ゝつ以る咲て錦　宗
借の手紙消遠で乃やふゝりて咲　悠
緋紙の仕もうも清油ハ一流　宗
毛のひく毛涙手まゝくて月すゝし　悠
葉まも川鐘戦術乃見えり　宗
琵琶語乃尾手四五郡俳其紀　悠
何とおらぬと汁の松る　芭　宗
ひよりのみ揉嫗をまず工夫する　悠
中がみ座敷く見れる　棒鞘　宗

ちる柳すれも寝られぬ庵のむ　隠
きりも五加木も菜の手摘ひ之　宮
　　　　　　　　　　　　　　隠々
花うらけゆすつて樓も身たり　史千
夜り行けまの東雲にかりんく　隠
嬉嬉くも老よし何と行とりをて　千
去年二つ八墓筍の青する　隠
小川とし又一把さ隠る月の雲　手
鬼の香は蓑麦留守なし　隠
燈すりも風も尽きぬ夜の秋　手
あつひ淋えそやらする鳥部　子

国のえん八ツ十廿度よ野さ折れ　隠
湯屋てかへしかなる潜り結　子
打水の乾く間もなくくらく　隠
菓子折にさ留守る節　子
鶴うけて待つ朝木の綻びより　隠
餘りも若きをと来ぬ新引出し　子
法話乃ば一ずもつ燈も売る　隠
さ深しさ蕪の手かりしと　子
鶯うけて深き帰あてたかの花の落　隠
菜の葉にかけり五六敷ゆく　子
新殿よさしまく淋し法師　ゝ
粉糠働きて猪にあ乃素紀　隠

乙姫らぶさそて猿も娘の子　千
ふかりの菜も無き蝉時雨　悠
大寺も戸棚の雷子欲として　千
難題咲きも龍の住むらく　悠
新らん来ものまゝもう袍の緋袴　千
背も菜らぬ家もきまの子　悠
帝様に疎まれた韓多ほど秋の蝶　千
京も新穀さうらかの鋳　悠
陶ものゝそ鈴さのめし釜の底　千
古き世ものほめきらる錦　悠
楼落と先乃仕来の彩なく　千
姉らりし、へ小石渡くる　悠

宮すゝ秋の露を食ひ木にたる樓摘さ　千
日たうしふ毛り出しゞ月滝猫　悠
續月の隣舎にしも姨の都童　千
水影仕合で捕らへ菊代　悠
悠々
早鞆一本で勝る菊もあるき節給ぬ
眉山
諸葉の乞まし言乃集　悠
館の楠も出代着下影のまゝと　山
水都秋手宮の〆酒ぎなうなう　悠
便秘乃みくうす都鮮ものかは月　山
係りたるもち蹊りしゑ乃　山

香料ハきかり枯てもよい烟草　悠
大工乃様を仕出ス庄裡しく　山
町便あるきも用も滿て置　悠
川岸ちかりとりおちす　菊　山
莪あらふ岸の吉け虫し秋草も　悠
行さ隨ても第れ姫　萱　山
高菜の吉けてきつく條ちら　悠
料履を月ニまらはりもん路　山
様所れされ氣あ仏ち東蒙ふり　悠
小儀おれても入のよれ　堆　山
莫喫ら田男もきりきひ見し　悠
垣秋今の要へ丼り得條の業　山

古器の洗米のりく親雀こ　悠
古傘をーロ色ほしる　山
湯治所ニ所のかハ空おり　悠
出刹の法りすかさ手紙紬　山
嗅くしもおけ姫夕アの岳かり　悠
替く陽ホ所をぬる　取て色　山
蓮　蒲ト宗りる用ホき冬の実て　悠
宝奈へほみる條在履もかりて滿む手筈　山
来ニ雑　粽の　蔥　悠
達はしても詩役不く出てる　山
何まくくてほのかす我る飲の月　悠
あけくと作をおもる帰婦　悠

お節の繊衣縫ひに掛けり出る　山
かうけかゝて[illegible]尺來来　臣
山[illegible]ひ先[illegible]て[illegible]に[illegible]　山
何子か[illegible]　洞[illegible]　道絶　臣
御[illegible]の[illegible]き左　山
古手の[illegible]よせる　漣　臣

眉山

生[illegible]よ[illegible]の[illegible]より
接穂　団[illegible]のかりそめ[illegible]垣　臣
[illegible]纖[illegible]節[illegible]子[illegible]て　山
[illegible]つる[illegible]刷毛　臣

[illegible]九[illegible]の[illegible]月　山
[illegible]る[illegible]扇子[illegible]円　臣
[illegible]の羽織　山
何[illegible]葉　[illegible]尺　臣
二十[illegible]て[illegible]　山
[illegible]を[illegible]の[illegible]し　臣
[illegible]ける[illegible]　山
[illegible]本も[illegible]引　臣
[illegible]の[illegible]月　更て　山
[illegible]細[illegible]り　臣
[illegible]の[illegible]り　山
[illegible]し[illegible]氷　臣

舟宿り入るの古きむ　道を遠り　山
待て追ひかける　梅の荷つき　照
跡の見ゆる　隣の客白　かすむ　く　、
いもや　に　白き　のつきし墨　壺　山
借りの　あるゝけハ理屈も消しひらく　照
出来りたる白ゆし　塩　血の鞭　山
押入乃うちに　掃除のむつかしく　照
死にたる　娘ハよ所にまかり針　ろ
染まりも　酔て　迄まる　泉講　照
錦も　き祭く　余吾の丁鴨　山
有明の　余所の　渉り　花　照
事もなき　春も　花ゆる　草　山

宿らぬ身のふに来る笠紙挿て置　照
夜はけ前　追り来て消える九　山
つまさきて　行ゟ人入ぬ数の世　照
遠く加れて　来る　船　錦　山
乍附中に寄る月の　銭　酒　上　照
そゆも新　夢蔵　節乃寄りめ　山
出つゝも　深しは　葉ゟ揺つまり　照
露し　菜の花盛に　初花　山

侍る処も　を　回廿の　月　梅　萬乳
萬乃花　青かた　揺まゝり　卓池

爺婆か月を送るや郷乃芹　カヾ 年風
花ハまたところ／＼も山のさくら　米沢 太栢
若菜やむかし童も乃手習し雑　モガミ 稲翁
おもしろや大仏近き山の伽陀　松前 希虎
若草やまたもおしまぬ月の色　ヒタチ 雅禾
木へ向て来る鶯の花の山　下フサ 江月
飛来る梅に人みえる垣根かな　楚南
見おろして花の雲のかゝりけり　比古
啼鳥の基先の挨拶かゝりけり　子行
若杉也魚取かゝる竹も落し　竹亭
散る日も梅の包や畑の縁子　双居
草の芽やほころびくの来されれ　上サ 呼牛

鶯鳴や寛政ならあらた年の　飯雪
遅桜の春を残りて木の芽の　永保
百乃挨拶かけし華のみ　コトヽ 復物
あやめの花に文盤の尾　史千
春もけふ咲来るへきあの月　茶静
若菜や朝日の乃人の春ならす　遅流
出遣乃春は陽の杉の　洒入
うつゝの杉柳の柳か　壮貫
桜木屋乃春立して花の哉　苧見
山吹也雨のかけし花の水　自起
枇木桜もう春の梅花かな　芳居

梅花の袖につゝまる接穂かな　寿堂

咲出ぬ日はなかりしや春の梅　和東 助宜

おもふ事八ことはらぬ菜の花　有月

うらは梅也二夜に見え八垣の外　雁嶺

ふらつくや老人の蕾も椛に枝　禾葉

鶯や清へとけこむ霧の緑　抱儀

飛入て源のこゑ(?)や春かな　禾木

鶯や降らぬ先えこぼれぬこほりの音　大梅

咲そめし初菜の浦や雛の声　ミカハ 水竹

寺に細き春雨降りすぐ降り　コハリ 蕪山

初旅の心もまだの雪みだれ　アツヽ 一嘯

早うら梅を見てもいそがぬ春辺かな　京 千崖

おくすもすくす鶯すくむ柳風　枝月女

年かかる雨とまりし接穂かな　十二八 鼎左

白梅也落るは梅の雨　紙白

鶯春の子遣りて来ぬ世の廿日かな　スマ 西月

折てある梅の嬉しき細うかな　タシハ 蕉夢

一すぢの鶯けりや出巻(?)　アキ 三蔦

春の日や見え擦る青うた尖りまくり　フセン 木父

なれを着て見るは男猫の恋　チキセン 月平

鶯先の声も春中かな　雨堂

飛立や居手に乗るうちの夜　ヒセン 梅調

枝木ある雲を折けり梅の夢　雲水 桐堂

出口まできれる梅を女房にすら(?)　呂叟

ちらちらは針さきは飛ぶ小鮎かな　来臣

若竹の咲きて居たり蓬が軒　末牙

ちらちらと霧雨降る笠の雫かな　玄子

つくつくし出迎ふて買ふ加茂菜哉　可大

若草の足つく浮かみ扶の町　晨支

月夜から梅が香のすべり来る　学朗

古池に水たまりけり梅の花　梅玄

御所の引船の岸して雛月　大ムラ 有両

森の下りて見をみてふ君が哉　春圃

振り帰り振りかへりつゝ桜かな　素旗

ふみ分の若草ぬるこそ雪れなり　東育

宮居らの明かりの灯りもる　一点

葉ごもりの花や書室の御方屋　方庵

赤子抱く置かれて揺や蝶　翠雪

若草の茶の香も薫る　梓阿

杉の上に飛ぶ雁や朧月　素水

小鳥の眠りて居る障子の影かな　一応

涼しさに見上げて是非ける初雁　眉山

幾世して置ける細かつ男かな　悠々

鳳朗

抱き合ふて見るや涼しき松の背

見る秋の籬の汀すずしかな　照々

新緑の花か末にも咲く入れて　郎

ましろくと火吹竹ひく　照
ちらし柄かへて月ハ安く出た　郎
二百十日の合羽ぬぎかし　照
手綱とり夜船聞て走り出し　郎
さむらんのちねあるあふね借蓋　照
湯治場の二階の峰のあく経き　郎
まらうどの帯のえくりかへらぬ　照
岡田辻宮ゑひらるしく棒の声　郎
なみだそへて狭引有りに好　照
月影何雲の時もよ葉ちりけ　郎
扇の麻の宵絶乃拝衆も来る　照
ちたす日る猿飛浦[illegible]や根くく　郎

なまのちなりと羽織来りける　照
深さ拾二寸十ちりに落いそのと　郎
ちなつちり来む　猫乃人もなし　照
さうぬ餅に出る松鏡の福をきよし　ゝ
わんさく赤子の声りく　お傘　郎
御合のらんをいつより隠る入　照
上野行隣り　縁生ありし　郎
楼町人楼うりつめとゑかる屋　照
青のつりり陽気静にけ[illegible]　郎
丁種行なるたけて[illegible]　照
すんまと[illegible]の　根る　押氷　郎
けなすか[illegible]　照

湯けむ雞の通ひ消えてしまふ　路

夜鶴月晴舞ひし果てなり　悠

住めはすむよそ舟か出すかも　鶴

昨日まてあけても宮も半ちんり　悠

萩原の咲はしめて呼んて見る　鶴

ふり月庭羽抜きもあかる落る　悠

あさりすゝふす　桜実の初　鶴

晴りさの果ては解けて見たる　悠

咲さん花のみるまつ散り青　路

物に蔵てつむもまさか常裁　悠々

帷子も紀川の咲あけ　桐雨

業なりまかせ可得ても字あれなく　悠

何も又有秋りつく寺の加りくさ　可

なき衣の衣も積おく月影なれ　遊

ふりもすゝめ月満る蕩し水　可

桃くのゝ縁は名ひ法師夢　悠

用格住まふて縁の律文会　可

つくさの鶴く買分紡神は雨　遊

まつ来の咲え何とり乃羅　可

桐のくさも物の庭まさ冬めさく　悠

寄に生愛乃まは住めつく　可

僧ゆくしなら縁は難くも以く好月　遊

二百里来てみれは尽しの春　同
ありもすれは出かくる船も霞　悠
聲楚く来るのあまる夜の噺　同
咲さうて見へる花のちる侍　悠
草の風見るも如るあ筆の跡　同
名に能移の足袋すて接ふ者り　、
井の底ぞたるむ水鏡　悠
雨上りまた宿へ戻の手帳を子　同
麦流るゝ接木かゝらし如　悠
吸もたらの腐た膳の菜接く　同
当へ見る出るに糸箕新薦不　悠
今日は[illegible]の新所　同

又来る燕の軒の宿あかる　悠
面の底しも紫幾日も住まり　同
朱紙よろけ鏡り顔染　悠
月の宿よぬへ山ん居て　同
割出子能淀の澄む　悠
縫て出す解る従え草葉末　同
似原其の樣ん来る　悠
家具も一度調度の在るに好　同
乞ふ猿しも見えぬ飢口　悠
菜を生す庭小細の山の思ひ　同
東方の寄て出ぬ衰し　悠

禾木
外科子も紙やうるさん羅仁物　悠々
川田一服たのみに勝りぬ　木
つる静にも供養の子るを眺めつゝて　悠
出さるゝる篩乃手底　木
雨乞りおらぬ月の茎直す　悠
纏乃茸生え個も鍵かし　木
あらゝ升悦ひつ芸八ふ保米　悠
ゆきり何もそろさかる殺引　木
宮僧の寺仁隙に寛まし　悠
味よう庵の書かる廿貫　木
蝶稀の消すを書る素暫

起て引く出つ入舟乃帆　悠
手ぬめく雲も行り出る茎の舟　木
路迄うけに鯛見えりゆく　悠
寺無や乞ろらの借手鍵ゆりて　木
異庵の宗仏咲第く支杞　悠
花集りもうた杉ゆ保晴　木
塩杉乃霧の茎かけ生嶂　悠
能寺ゆるえて宗良紙迎りたり　丶
法くけりる借の大小　木
焼き魚の路并探りて漂の入　悠
鶏らちや子した状乃らは津　木
糠くけ乃雪紙酒吸せ置　悠

餞袖もかりの浮きる庵　招
ふる里ちかう多くの御さしを宿々し　巴
きよらかりまゆりくる　穗　木
らく鶴きりそひいひさらうまくるる　巴
香ら絵ひ家すする猿の家の世ひ介向　木
蓮咲て入梅よけさく身呼り　巴
ちよ用ゑうら流し　小　虫　木
此秋も菓子出おみく咲麺　巴
みかをたれひ秋きくそ出来る　木
路色くらかけ棲むあら龍　肩　巴
二階ふらて遠くあくく　加　木
高せるよく志あらふゆる寝　衾　巴

暁の追るて餅子柳ゆる　木
馬うけ雛畳子掛ひや流しけり　青芙
葉分屋光色の浅め婦戯る邸宅　田鳳
樋麦乃ちさ絵印老子盧ちひて　卓洲
時もうもぬけり雲代する　芙
空しら水の扇かすて新家　悠々
すゞ豊大引張らうて舟の声　洲
杉藥防ち弟きて八翁うける屋　鳳
あくまみがそうら様の手傳　芙
影うきく後も流ちほきあし口　洲

[illegible] 但

[illegible] 英

[illegible] 風

[illegible] 池

翁の[illegible] 但

[illegible] 英

[illegible] 洲

[illegible] 但

[illegible] 英

[illegible] 風

[illegible] 但

[illegible] 洲

[illegible] 風

[illegible] 英

[illegible] 池

[illegible] 但

[illegible] 英

[illegible] 風

[illegible] 但

[illegible] 池

[illegible] 風

[illegible] 英

[illegible] 池

寛哉り火種うつしやすめ　悠
日暮れ寒さめのこる子猫り　英
庭ありし花乃きえ味悔　草
悠之
山鳥ちの声よくさ篝やなき花　雪誓
篁乃ら秋薪改もやつく　悠
大鍛冶屋よりあまる炭竹たきさき　誓
とんとまり秋　燈　鱼乃竃　悠
明移の豊燥う月の庭かかし　誓
筆記のとりさへ　店常ゆく　悠
居まちゝ手毛見るに声も游佳ち亦し　悠

満れめ家のふ穂りよく候ふ　誓
あらひ髪棲子あり候ふ来り　悠
熊の掾は手針箱針母　誓
夜接ら露てさ去らり嫁ふ家る　悠
まちまれのありさつ以済せり　誓
菊の茶ん与生ト資孫へ五盃り接　悠
去寸の笑出もの接ふ　花文へ　誓
氣屋出るる蕗せれる面目さ　悠
いさ移とかしてれし朱硯　誓
身より来るる追置めて親の愛　悠
西衣よひかる手ちらく秋　細　誓
雑ぶ楽人からけ去年中の竹婦人　、

大工いれるも大勢き　むく　照
ほとかきくさきのさ国ハ晴あかり　誓
あまほとかいて青ようすなき　照
とけるみ行教行でも木ゆく稲も種　誓
かくしく鞍を蝶楽も黙り丈　照
古気むのゆ作り経めの小盃　誓
あふつ笠屋よ手うん浮り出し　照
雁ヲ手も浮身の当ん未年弥保　誓
砂村鉄けんうえの同よ行する　照
月の木り鳥さし浦の草み花完　誓
琴浮稲も浮か然きぬ宿　照
梅路をあふ今年柿の実のよかり　誓

麻の直河さ買　尾ささ　照
庵咲き成乃る猶衛けりすまる　誓
かうん乃京水如節化様撥　照
わさし米花紙乃陰もうつかり　誓
うきるくしすり神の菜逢ひ　照
松原新出鼻と寄つしみ有うお　蒼虬
名然とそ伸くけの子昔いかう　卓池
優くうまん稲一枝苞拙もて　カヒ 嵐外
巧の菜餅田ヘ经つうる為ふし　ぶ　与手 一兆
嵯まち鉢覚来るゝかくり舟　上毛 逸淵

麦の穂の[illegible]けり　オク 芝河

[illegible]　下フサ 桐両

[illegible]　提耳

[illegible]　静達

[illegible]工合　エト 闰天

夏[illegible]　丁知

[illegible]　得葉

[illegible]　春諸

[illegible]　一様

[illegible]　一具

[illegible]　スマツ 景文

[illegible]　見語

[illegible]　澁山

[illegible]　円鳳

[illegible]　雲馬

[illegible]　波文

[illegible]　義覚

[illegible]　秀外

[illegible]　大嶌

[illegible]　枇杷

[illegible]　蓬端

[illegible]　イカ 杉床

[illegible]　アマミ 四明

[illegible]　ラク 梅便

夕すゞみ家まで床机かつぎけり　十二八 眉岳
ひとまとめにしハ銭らず萩の花　岱年
螢狩り兼るやとげもなき蚊帳　茶常
朝夕に出ぬかゝる清水かな　タンハ 野揚
藤てさへもの除せぬ暑哉　アハ 露泉
花桶に二日経たり燕子花　路里
おし水の中や初音の郭公　サヌキ 花楪
逢ひ見ぬ先に家中の蝉まつり　コンゴ 諸青
清水のミえぬ程なる霧の中　チクゼン 字逸
笑ひ出る草花ゑらんだり　チノコ 和義
一声に泳がせけり浦千鳥　セツキ 素行
一輪なる家の池溝水菜のさし合ひ　雲水 郁岐雄

はしあやうくすけて涼しけり　碕山
五衣舟ハ長き袖の夜越し涼しき　蒿了
夏の夕り夜あけりの中け尤も涼しさかり　風朗
梅屋の小窓へ吹かゝる涼しさ哉　梅宗
涼しさや葉の陰より出る月の山　素琴
五月雨あるゝ中葉蔵の萱涼し　寸長
挿て来る菖へハ中に葉にも乱　標山
笠売や二日へかゝる夏の月　小左
うら浦や涼しさうなる雨の紙　湖月
川中を眺るのみや初松風　甚青
蟻も少し山しく信寄り山の寺　椽庵
夜たゞの夕ゞ涼みて帰りげり　松宇

都風をたしかめけて茄子の花　眉山
葉かげのまでくつしまる茸分け　悠々

桐雨

鶴の聲 結扇に勝てあかりけれ
はるくちらくと秋の川隠り　眉山
月見ぬ花の香もしに跳入まくて　悠々
津らなゐ先は満蝶行くる　雨
芽新花の只れて傳ふ作筆字　山
はなれいつく名代清香出尺　照
拝の時衣大宮せ々豊の先　雨
鳥ぬ牡の関守　けいへる　山

中川とまる積年猶と振飯　照
いつまねんた往衣をふく　雨
如く紙年に清る他のとらつんでく　山
指面白くみり出家中すてとる　照
宗のむらぬ見々子使の探婦ひ　雨
傘けす色懐らん苑大降　山
宗り面も如くへるたこり給る了　照
嗜貌会銘筆まり中せ　雨
藤静へ先藤に説の芸芽の縦らけ　山
飛てたく程茅庭ちり如る　照
只静か木立の楼ル人ゆ夏て　雨
晴秋ち中る松角鉄　如ぬ　山

さゝの後すのも　飛とかゝけ　候
海老ふくしくしゝ手ゐをも傳　而
啄く居ハ蛙啄阅も出來加く里　以
奴くも蕉ゝも　蕣并礼ふ安ゝ　候
境あ中も妃妹ハ料理ハ麻ふ付　而
むゝ月の佗の中手無　其妙妃　以
迷得けをめつ而之耗の貿居欄　候
痛ゝし平子ハ萬　葉其の實　而
以ち手自の樗様も以ひらもへ　以
緣の志こ昨手　鷄　あ川なる　候
鱼好新川方き里をハ中しめて　而
も用ゐとも尤く好　自　雪　以

翁以後家のふるも古きこ館の叢　候
其のすさひ程まつひ茶する等　而
客なく乏宿來もの其ても其わ川　以
時節の葉すりすら心猫の葉　候

抱儀

猫來のつまさも　接待　蘇　見　哉
玉毋う泥くり　押　水　の　路　嘸く
あんあくき宮手居自の路移て　孝老
そ川らこ志め通えたく無　宮の居　儀
露も蕉をも此收かくまめ余家ち　候
つ逢ハ通りすとし　四　の　字　以

儒者ハ六国[illegible]也とかく筆らへ　儀
出来ぬ事は無き[illegible]かかる　愚
四書五経[illegible]今の書[illegible]先　書
禮押[illegible]し[illegible]の　儀
ち[illegible]よ[illegible]けれは[illegible]り　愚
何[illegible]川[illegible]　書
薗[illegible]十[illegible]　儀
新海[illegible]　愚
[illegible]　書
釋[illegible]の[illegible]　儀
百[illegible]先[illegible]　愚
書の[illegible]　書

学[illegible]人[illegible]刹[illegible]　儀
[illegible]の精立　愚
[illegible]　書
自[illegible]　儀
[illegible]の[illegible]　愚
[illegible]の[illegible]　書
一[illegible]の[illegible]　儀
[illegible]の[illegible]　愚
[illegible]の[illegible]　書
あれ[illegible]代　儀
[illegible]合　愚
源の[illegible]大[illegible]　書

鹿丸のいはても惜まるゝ之　儀
たつくこ二日の糕をわすれる　恩
背の子ん今まれ桐もつきさまらぬ　事
春はりふくんのたゝぬ華の時　儀
独孫の物おもひ五加木も接ぬよし　恩
とうやうら婦を辞し　家のうち　事

初蝉や洗ふて花るる笑　第
経の子て旅すれ子る雨の風　卓也
菓の香ひいして金ぬ　筧口
都ゝ原の歳たてはまる供ゝ事　鳥柴
三十 桂中 圭帝

露より千代ある月の雲　越后 篁里
今年はいくとて俤ろり道淡衣　ちかゝら
都は隣る芭蕉あり見ゆるゝり　オク たよ女
梅はや枝の清く秋の古にれ来　江戸 謝堂
川にてそうらくし憎し絶ゝ事　唐ゝ
四一枚刈て待つた彼岸へ来　英山
春の巫女と隣まつた此二三日　加つら
罠を庭毛とねる夕暮の籾の色　玉翠
人影し偶り芦とく鐘篭戦　千鶴
秋の夕や庵ちる小菜畑　久蔵
幇き生ての親をも視かよふ朝　松什
たゝかゝ狂ひ拷ふ人ゆる渾ゝ方　遠州 旦松

朝白もう流してもすゝぬ柳の灰汁　ヒタチ　三槐
一思案してつりけり情ぼうふ　下フサ　鬼臼
明る人のうちより一人は萩の花　上フサ　甫甫
すゝきれぬ川越さかりや十三夜　ヲハリ　沙路
素顔より少た伴てみる木槿哉　而后
追つきも又わからぬや稲の露　芝石
蛤や也川ら子杉まで草のうえ　鳥律
船よりまさ見ゆる蘆や葉の露　月庭
芒の花ひらく撫子も女郎花　十二八　一肩
松明の火ほりゆるやあきられへし　丹后　万菊
庵主する忠敬しての蝶　長門　峯丸
おかしさは勝る秋の秋　アか　太笛

陰木やくる声の此ゆる走りゆく　チクセン　士篤
侍りけはすれ日のさゝ野一葉かな　斗文
生の萩て住まゐの秋火ふりきり　古沙
出女のくせ乃種あるみゆる芭蕉　ミサキ　甫耆
不知の楼行満月の影棚かな　盤雲
芙蓉よりもあさや澤のよしとむ　ヒコ　竹重
ちるそ夏の草のたしな紀伊鯉かな　安房　金呂
秋山葉満足来のよもちりかゝり　雲水　薔白
宵月は降りかゝる紀伊も小田の戸、　荷史
呈吉に墨ゆしき萩の名所　継老
出来たれば住良よしの山の月哉　鳳羽
見る程あきよけうる秋花かな　梅宮

帯まはほど抜けて一葉散るなり　露水

すれあふさ中程鼓も桐一葉　湛水

ぬり笠の見人がすり峰に降ち　雲鳩

謡の糸引て据ゑ一葉の文　左素

従ふ娘のからん左字し萬の文　竹今

都から便也紗引ゝる戸の香しり　静湖

花そうら宿につまし来る葛花卯　味園

鳥も取ら何し吉すらくの野菊里と霧　浩落

月ていのる宮よりの高紀絵竜鼓　巴南

月に君宿れるまで小粒法　眉山

冬月の手触りに出たり茶めりも　悠々

蒼乱

一夜も野毛もそゝ遍とりしられ　悠く

梓弓見かれきら特乃香つ家　乱

波のさ尻氷て扣菊他のよく名来て　悠

旅猿ん吉よりたぬる漆　乱

子僕坐す話足休まる宵の月　悠

かゝまきて打けた郭子の手花蘇　乱

ちよつとに猿隣る断ぬ江郎後　悠

鼻血宇む守て卿り命て分る　乱

幸綾く東のゝて三十嗅つり　悠

何まそり隣中ら物る異くく　乱

年寄たる人の役をたのまれて [illegible]

屋の傍らにそふる角[illegible] [illegible]

[illegible]綱乃[illegible]る[illegible]月 [illegible]

[illegible]つれて[illegible]花乃[illegible] [illegible]

町[illegible]の中[illegible] [illegible] [illegible]

[illegible]した[illegible]る小[illegible] [illegible]

[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible] [illegible]

[illegible]乃[illegible] [illegible]

[illegible]大[illegible]先 [illegible]

[illegible]まりし[illegible]代乃[illegible] [illegible]

[illegible]人の[illegible]て[illegible] [illegible]

[illegible]の[illegible]て[illegible] [illegible]

[illegible]の中 [illegible]

[illegible]乃[illegible] [illegible]

[illegible]の[illegible] [illegible]

[illegible] [illegible]

[illegible] [illegible]

[illegible]の秋入 [illegible]

[illegible] [illegible]

[illegible]用の[illegible] [illegible]

[illegible] [illegible]

[illegible]て[illegible] [illegible]

図子の草もとしし見ちらちむは　湖

水くくるうちから雁もみ〻細　凡

葉乱

蔵掃て[illegible]たりたる小[illegible]の　[illegible]

御蔵を貸よく乾く店先　郭陽

[illegible]なくも[illegible]の杵の[illegible]　[illegible]

[illegible]ち[illegible]欠く押水乃流　凡

[illegible]く[illegible]月の[illegible]　湖

[illegible]草[illegible]け[illegible]　[illegible]　羽

桐[illegible]の常[illegible]　[illegible]へ[illegible]　凡

酔[illegible]　湖

[illegible]　羽

[illegible]の　[illegible]　凡

[illegible]　湖

[illegible]の床　羽

[illegible]の[illegible]　凡

[illegible]乃[illegible]の[illegible]　湖

[illegible]の[illegible]　羽

[illegible]の[illegible]の[illegible]　凡

[illegible]　湖

[illegible]末[illegible]　羽

[illegible]大[illegible]の[illegible]　凡

[illegible]　湖

二の丸乃古鐵ゆゝ[illegible]よ　冏
出恵[illegible]利[illegible]家[illegible]　凢
道の[illegible]羊[illegible]日[illegible]　照
[illegible]乃[illegible]　冏
[illegible]出月[illegible]　凢
[illegible]　照
[illegible]　冏
[illegible]森の入[illegible]　凢
[illegible]　照
[illegible]　冏
[illegible]の[illegible]見て[illegible]　凢
[illegible]乃[illegible]口[illegible]　照

[illegible]の[illegible]　冏
[illegible]　凢
[illegible]日の[illegible]　照
[illegible]周剥一皿　冏
[illegible]　蕪凢
[illegible]日の[illegible]　京師
[illegible]の[illegible]　七文千 野菜
[illegible]　下面 文し
[illegible]　下つ廿 巴陵
[illegible]の[illegible]　工ト 卓郎

錦のもみちをりし時雨かな郡　ミカハ　流芝

出る月のうすみ霧る宿の秋　青可

宿老や関人へ行つゝ　雷白

此月もふきもまた宿にありけり　鳳也

岸つゝき草紅ましにもみち　葉取

藤の菊見るにも[illegible]　朝陽

秋霧のも[illegible]垣も[illegible]　芳英

降つきや[illegible]丸り鴨　並隆

またりや[illegible]舟ん　杜鶯

人の声も枕[illegible]野　丈翠

[illegible]侍り[illegible]精大路　鴛池

草木の[illegible]ゆく本の[illegible]　菊渓

入能ふ友有月も[illegible]　芳舎

[illegible]出すの[illegible]　施通

[illegible]の滝[illegible]　十二八　林蕾

庭神[illegible]も[illegible]　アハ　古峯

[illegible]様子や[illegible]　チクセン　石永

[illegible]　祖々

菓の花も[illegible]　長サキ　菓也

杉も[illegible]　鈍史

[illegible]　十二八　蔦茂

神[illegible]の[illegible]　鳳朗

[illegible]の[illegible]　梅室

[illegible]の[illegible]　大ムラ　静々

いふり岸船にさそふて拾りけり　一宇

宮売の手傳て蓮摘出らせ　一笑

松葉ちる声も聞ゆる最寂かな　可水

月もと消て散る日を花の朝　亭舟

月ちりし娘たる家も冬紅梅　眉山

積さらす雪や松竿の下より汲　悠々

天保七丙申季秋

川原氏　悠々編

落穂集序

むかし是を拾ひし時京師にありし人の東行修せ
ゆゝしゆかく田舎にすむ送ろ清河あらしと思ひ
あらじく羽歌月ともる雪月花を携して
世話世に見ゆる月の行き乃井須より尭の付発
すゝ傳え聞之縦雅きをうけ出りて落穂拾ふ列
穂を拾ひありむる人の行つ事にまたまるを
清河の以ふまたえ托錦をもて集録し養ふす
録なされとも拾えた傍を穂拾ひとそとりし
ちりぬる縁えいりしとおきえ農をし業とす原
人のいひまするて千枚の径の落穂拾ひ拾よ

我邦の種子は天地のひらけしはじめより人の
栄えるもとゝなれば種なる天縁をもてあそぶ
其の種子れしけれどもしかしながら
なる大人度年細絵の種類の図をあらはし
此の原文をあらはし年来あつめて度種と
よふうちなる種々の図説を集めて是は
造化の神の作り出せる物にて見る者に徹する
ものなり又これを見て種々の形のうちも
種なるといふは種々物にて是を加へて
つゞりしものは種々の度種なる物を集めたり
度数の図をあらはしたるものはならぬ事と云
後世のよむ人ものもあらはして所を知らん

書紙のはじめに序となす

天保八年冬十一月　八朔　夢居兎誌

京都大學圖書

萬歳楽

郭公や鳴のほよりすむ時　抱儀
雲打ちまくるこのすきまし　大梅
投けて出さし扁園院義光卿述　令
清水を扱んで打ちうつのうけての手　儀
吸ひのこす桶の底に半月あけて　令
筆育の暁乃寒　弁　梅
五六里も本ん保秋さし来野寄り　令
あら先の実の花のうれしき中にも　儀
倍ことと佗ひ出来ぬもの引き入　梅
かりもちろうしかける椿の開　儀

又しても古来よりあるものより投　梅
来ても見たさん桜守まで来るよし　儀
柱の下にかけ残る上弦月赤く　旅
稲も出来ての照り照りの照り　儀
摩る親は騒いて植る竈祝ひ　梅
来えたすまさる海の丗錨　儀
巾着へ入れさせて荷の下足　梅
来れん所能傳はりて絵　儀
飯時に来おた気になる厚薪　松什
明石の御母へ返す出ちてし　儀
借銭たまさき芸者青柳　什
たくしのか来て書きたまする　儀

菊形のそのうちうつろふ紫　什
かゝはりもなきを忘るゝやせ畠　儀
七千の後の栄えも行きて　什
秋をは絶せず濡るゝ蓮池　儀
うきよにたえたる食の跡にさへ匂ひ　什
履りのつきつ月花のおもはゆく　儀
緑の衣きとして今ぞ来ぬ　什
暖簾を小さしきつらぬ墨の月　儀
冬けしくふ毎日河魚の伴ひ　令
何かくもさへかゝる居風呂　什
年よりの形見ハ仏の厨子　儀
麻を着てはしたなき昼　什

見はてぬ夢も千代の夢にわかれて　儀
かへるべく山嵐吹まける峰　什

頭陀狂人　護物

喰摘や秘めしはのかし日本の経　旬光
浮ぶしき字　梅の花に去　物
儀よりも春をいかしら京させて　光
箱の御形の鏡をかけする　物
月夜の影八ツさくら月を打　光
刈株より出る門先の雲脇　物
もちかけて来るゝ咲く花の縁　物

蛇篭をふせてとめる山の　光
蕪菜の手りの桟敷をとりあけて　物
紗綾乃買場のかたある村市　光
人数の追ふみえる姉等様　物
何となくまち兵売る紅皿　光
嫁背の女ハすゝりあるけれり　物
鼻の居る垂てしにて秋月　光
とれさかる顔ハ聲に詳る銭　物
曲宗の足より　けある穀売　光
書木戸にて書しふさく花一本　物
芦の古根あつり霜の枯ところ　光
春に写す菅供乃羽あつ委しせ　令

人もなかりし仕舞に短着　物
衣柄古裳の見ても見事なり　光
潮来乃結ひまでり墨の川　物
運ぶ於者以投網と手ぶ也　光
口まねしてみる納不将事　物
蘭汁も保て手気にかゝる土用干　光
田舎芝居の見物人あるまゝの　物
ぬらすとぞぬるむし虫の聲の寝ぞ出し　光
西吹たてゝ汁さへ稲葉　物
棟の実乃あろこつる月に板庇　光
岸に生ずる茎湯が秋　物
津松枝猿ある付見取受　光

母抱きしこそ唖る子の泣　物
放しやる乙鳥も来む声あり　光
まくらに杉葉の影ゆり勝　物
日の入るに紫雲まきたる草明り　光
四手なちしにうつる鏡の子　物

護　物
大勝

ゑり替や枕加ふる嚢の以
手ぬきまとしよけしを扱菜
竹鮒を鍋の露煮にえりわけて
少身りの責乃ためしに母もる
菓子名付撰美くしき春の月

物　勝　物

常盤わかれ里のうらかれ　勝
狼のあとも去らし枕角色　物
囲ひて境へ手をつけるえ　勝
親の薬に薄も丁寧丈に合　物
つひあらわすも猿さるれにあ　勝
ふらつれたるは花さし杜若　物
御来の唄もみし家の月　勝
色理けのたに半まに生まる海の人　物
出陣すまで姑が家に居風呂　勝
本城の諸勢もうちそろひ　物
日本けた器す笠細のあと　勝
ゑり紙も新しつの葉宗井　物

さ持しおけ先七ミえぬ娘錦　彫

杜有

月の障りに畏りて扣くなる之　護物

折〻汲の幾る蓑　庇　有

底尻ち柔か汲んで出るおりて　物

そ紀ま生れ手ちる似寒ろる　有

摘て来し芹を束ねる茎の月　物

終るも加さし娘螢の伊達に見　有

ミ中ろ以帰ルも部屋の清て見ます人　物

墓目の有之間へ差入て行　有

撚風附ちらへえき紀羅の蓋　有

一言季さ中歩りそこのそこつまり　物

呼かれ乾嘉弁わる粟田山　有

鷹あらけくしと居る鷲つき　物

大切なる燈七消いさ月の秋　有

茶摘の眼りたらぬ堀もり　物

出したる女の汲む年に気味のよさ　有

寄り似合って葉の給着る　物

職人も涼む四月の花ま来て　有

尻たけろき猪札すて網　物

手てある白ひ手にきせる餞乃軽　合

杜拝汲の先觸ゝ来花　有

丁寧てなか資紙のかぬ揚幕　物

象の持てる足の縫物　有
大濱へ贈毛すつて呵らる　物
法緒つも出ぬ辻畜の箒し　有
箱めしれ上りし只なる飯り母り　物
はひぬれさすの残れる鮫へさ　有
塚葉の狸の薹代掃出し　物
杉餘鬼乃供物豊てかふきつて　有
月にとて折紛されしたる風へし　物
敷をさ吉や京小田京の町　有
宮かしてカまけぬ市篭　物
落用きりてたて長男　有
芝居まるうしらつさ内をまるてひ　物

浮世の月なつきのうちはり　有
寄情にしきのある芳の里　物
出り法りぬ流のうちて果　有

表紙乃うち

語杯の梅とし花さめは守せくる雲もきよ句ひ
花新芳峰紗ききを紫の簡りも氣りなくり青
柳の以とし細して来る喜まもくるる行くるつの
浮遠まへ[illegible]姫す去へむとめつたし絶の水形
おし蔭と花たるあしさ法しうく見たる門たるくへ
千軒子の森もて折新六郎の峰乃名残たかてし

飛らさ丈尺まゝは其作者ならふの新をとゞせ洗て
志め絕の前事にかへてもいゝ迹のしまけ志る人
出来見乃ゝかゝはゝ日傳新の俤をとゝを
得たゝ欺はゝひて志めの作ゝいふも今を年へ
ら綴りしゝたゝ

日本橋本町の書斎つゝ樣の　志けの媼

歳旦

洒掃の刹那あらたまりて新　梅室

人起きて元日ならず出の色　一具

若水で算て居らん秘加とさ　部岐旗

若めしつかて起る初上りの帝　交之

蓬萊に退き出しの坂が郎　椿佐

拝ゝむる歳の雑煮の葉武　千軽

眠さ起りて門松かけて帰座うの　禾木

大年や門かけて松志ろ文　白桂

内縁や大毛物朝の涼取町　芒何了

十杯ゝゝ川上橋や時代の春　砺山

蓬莱や尋付けも本つまゝいひ　惟草

千軽

投入りて先あり玉の若葉哉

らむ行く山の清遊り　意　椿海

鶯なけは見らくはすゝし 揚家
人もなし蝿をまりもかゝく 白桂
あか水の涼しう月の冷しさり 文之
草涼し夜る柳 惟艸
二三四里も昼寝る風来寺 禾木
涼しさ信しく淋る涼しさし 稲
わさふ見まかしきめ秋出出されし 湖海
人手すちけ兼国の残わ紀 玄
涼しさ流るゝ氷柱の本家しく 桂
二日の月のみえ山里 之
寄されて涼信ま小寺合 艸
涼しき家と仔さ紀白 木

蕗浪に乗りて眠る振子先 鶴
吊りく出るの中 陸
花に形も早速るて手つ本紀橋 家
鳥からまう垣家さ秋る 桂
手裁さめ川たなりふる別像 之
涼しき綾はなもんな丸山 艸
綾汁多飛たれしさ晩して 木
十夜の月にふる津も見る 鶴
鶴うける秋の蝶ひる云秋札 浪
涼しさ蝶てえる轄子守 家
蝿も逃る大手の妻まかき 桂
ゑ汲て秋く入梅ある 之

あれ引は飯くふ時の作地哉　艸
泉涌川て流さし如ら立　木
月更て船の焚火乃まぶしさ　麩
毛の僧子乃横や是縁し　遊
芳事は芝蕉も薄ける庵の赤松　家
流るすきつんてか出来　桂
青葉の陰に立る嬉しさ　之
二月乃わかり　ミ中保　西川　艸
方は花いるさる精へ作れ　木
都鳥さ中し垣の内ず　単

喜藝

若なかや先しらぬ芭のおく橋　禾木
川あり有て角から折しう家　友之
よく月て曳た小松や杉ありむ　惟艸
縁実や一里を越ゆ白もまり　蕉了
唐人の中より下るりのり仕里　梅家
咲かする葉ふり梅の枝さり　都成雄
手立て新ほら新尽くの干肝ひうる　砺山
志多せ相し事なかし　一旦
若子や背も文字もおくつらん　枯浪
こつ渉は婿りし稿君城は折寄り　白桂
帰り鄕ゆり振なく旅は亭や草新井　千穀

一具
芙蓉や隠も通ふ姫萩の井
日すく寒のゆるむ水　青　師山
寒も少れ酒来つゝ冬の信もなく　千鼓
名所落らしき月秋つゝむ　荷了
ねらふみへ花かかりけし月秋　梅窓
烟草の臭ニまきむる床古時　具
大川屋も守る待出し本綿様　山
後幸ふりしやとる尾の長鳳　鼓
吹たうてはりいはふる蒸薫敷　了
了素集ニ芝翁出て行烟　窓

松籟り猫背ゝふまて系流也　具
紳ト泳ふ友つまそて五六升のむ　山
本屋敷の寒ゆかく芝の月　鼓
萩見まとりれ難儀も去ル　了
沙魚釣の細縦糸ニ札さしけて　窓
古柴のうかり行つまらん　具
ちかへくよ寓ふて甲斐ちくさ花の常　山
春風うふむ紅鎖乃菜はつ冬　鼓
名物の饂も元まれる河東ニ　了
新装へ気ゆる組　銅　語　窓
葬の出さ役所猿心の系様あらむ　具
曲家ニ出あてり走ん息まする　山

としの豆とそまたは嘔のさしかしく　黙
乞食坊主してのぞ隠しる　たゞ星　了
身深の宇宙あれと　余念の海　室
惣たくさまさる劉篭　乗んなる　具
またあけは前ハ句當の　秋あふらん　山
二篇もあし　七夕の香月　黙
明さおく住よの部屋月肩さしく　了
呼かてきすれたいたるむし　竃　室
採多町と済中合せの葉　蓋張　具
世の中からて　御うすらく　山
またあれさ懐かけとうの草　代常　黙
華院中得ハまり刈さ出　了

暖なるさりまつの菓子　室
やう節の縛の花する浅く　栄

歳暮　梅室

亀の尾のみしらく年ハ金子かり
来るさ手あ見て通る里　千黙
桔槹椰の立木子　はけて　彭枝雄
片手ハ酔うり草鞋　よ私まね　室
来るまの新しのをく月　明り　黙
むしろいまい　明るくの　草　雄
二日後の莫ハあれ大気統なれて　室
刺刀うさの加ゆく　ふくろを　黙

けうとくも乞食の娘笑ふ也　旌
袖すれあふて拝む揚梅　宣
夜来ては襟する隣の笙とけて　鶉
くゞり附さしの札たまふさぬ　旌
鞦韆に舌男も変る宵の月　宣
古寺の沓打二人ふる　鶉
華井に乃とくて庄屋の膳来も迷　旌
在くいたれぬ鶴兄生麦　宣
逢ひ子の聖律をもまりもまる　鶉
綾のかくろしまうり消え　旌
赤鰯ちらきて夷も薪あり　宣
春け華の本卅加しまし　鶉

家のまはる津のけり出床入　旌
暑さちらきたう孫　宣
丁寧りけさん古松の渥美る　鶉
此附たのり喜ぶ兆しし紀　旌
頭經の墓のとまりい猫の墓　宣
埃かふりたる小紫たぐ移る　鶉
雑炊の煙り香併炊出得れ　旌
厨もたくらず秋の七草　宣
降ぬ此こ絲の角和も小ぬる国　鶉
またひ晴くたくゆらく慕よくとす　旌
別々踏り替へつく寒蛾姓出負て　宣
笑へもわいらす簡けすみ地　鶉

暖に花まつるやあらしかな　旌
筏にはなれてわたる乙鳥　宮
撃柝の音白ひ座るあけぼのかな　数
名古ほしきも末ゆる谷ゑ　笛

雪せんと世をいとふ所さ流星哉　一具
除夜も霞る寒さ蚊帳哉　荷了
手本積よりさや時鳥　白桂
社の雪掃ひあらや尼掃　砺山
鶴の外に長き男も宝見舞　惟艸
餅なしや律せんて積る菜まるし　禾木

掛乞の姻停る旅しぐれ　都岐旌
麻をしらひんとしまふ年　文之
積るし持つ事古代餅つき事　桂法
らくまた年ふるす年忘　千数

雨森大様ふとす鬼も鬼もと
先ほいいくまで市街信
世のあふりにや少なき
鬼をも脱てつは何福
神祇拝んの春宵をしも安房
我門也杉さては人わすれ　梅堂

○

夷則

一具

田善更 若非

老し木も手入のよき梅の花　夷則

のりこ出しより霞かけり　一具

小傘を着り座頭の酔ふうて　若非

めりた丁稚の又わるさする　則

月けしてで踊記の音しらず　具

節のかはりり　いろさゆゑぬ　非

義茸小あひかけ問さよひつて　則

椒叶ふうき　伊宗嘛り　具

落手もけ分乞も針のこえぬあり　非

ともかくして女かけ姥後帯　以

隣は気すゝみよあきえ情もち　具

勇みけ社家の敷居　非

嵩高き綿着ものも　則

あるる人まくり扇力札きる　具

藤ゑすりの退て茸のいかに起　非

津ありる出稲し　菊乃清貞　以

のおもつら嫁に花のちり出し　具

日すしに春の永くある巣雀　非

一つまらば寄ふ繋けり庵拝てて　則

義さかは新もとくぬ算半　具

茶らしすてに出し桜の紀桂山　非

宋の帰り行つる石かうしき　則

痘瘡ハとりすんで麻疹きのかれたり　具
熱湯もたまらぬ夜の秋　尻汁桶　氷
寺の鐘の畔いちはやくあかされて　則
鳴は付つくる　鈴吉　納めす　具
七草の物くさきを芝居　浄伊賀　氷
年中櫻に気負　たやすまぬ　則
夕月夜手作の芋城へそ迎り　具
秋の鐘かきはとりまさたもる　氷
吾へきさらず妻まゐる時へ今寸紀　則
子供席を争ふ京　車出汽　具
古浦へ迎し船の洲法毛あり　氷
世をさけ請ける　氏神の笠　則

比ら文もとつ郷たまれしもかゝり命　具
友我膝の西はまえゆき　氷
由誓
手新のさ後もうかとし　欝の軟　芝庵　杜賞
図あくゝ分月乾く　白記
あくきみの培よりに挿うして　誓
櫻への法うちちふ　鞠のろも　賞
美つ首の出くりまへまる月の出　記
夭せ在て飛ふらしまぬ　蓮飯実　誓
次の轍せつくる坂　稲葉引むかり　賞
目うへの縁くりまかめんしらまる

今日ハ賑もしめりとうりわけて
くゝりみ三味のところ挑の葉
んとある一同よ栄ありひ
平にとくしても割箸ろ出る
稲葉よたけ乏えぐらさ筆清子
うくひの子分の清記ちぬ月
古條の玉府ハ見かきり秋めけて
まつかさ見給ふさくらから橋桶
帰りけて至る始清を借る家の報
背を取らひ給ちはる永き日
聲らくの好きみふりしさん修
為の世んよ取らまも来る

記　摯　贄　記　摯　贄　記　摯　贄　記　摯　贄

甚生とは年よみ先去りたつ男
神のはまりて賑の青する
水る千羽にあ庭らを池の作遍し
江戸寺のけまも庭に清中
此しあとけ来奉く太くる座敷め
桃も能竹て縦紋むまき
らくもうかる隅松のらかしうさ
掃除すまもち川もたく中く
月の出る明りに虹のうすくあり
ちらなる帝に息く新絹
来らむ鐘を来奉接まよつぶ
修品の字見てまも清江傳紙らく

贄　摯　記　贄　摯　記　贄　摯　記　贄　摯　記

うけ筆のかんをう京ヶ出るかう　賛
はつ毛あるをし紀あ作り鴎　哲
殊晴も達し去年乃菊のこゑ　乱
生ゆる紀ける　はる秋翁　賛
八　桑
青畑の秋作りと花なる春の色
こゝろ千山まつりまつ月宮蓋　惟草
むし銀の手もつらぬ中ゝ瀧の水々　令
菊ゟ乃壱りのいうりむらし　桑
葉火しくも船筆あまる部月に　令
むし絲あるけき生みし里あゝ　芋

秋されの辻の歩み培まりて　桑
笋の花あまき恃する　細　芋
鉄紀乃所月鉄ゟ[illegible]あり　桑
縁紀[illegible]ゟりける　蝶蜻　芋
錢[illegible]も衣場の花まぬ家まで　桑
妙水かけ[illegible]も[illegible]　葉楢　芋
晩し時大何所の忠出し峠出折　桑
赤見到[illegible]をぬ　秋[illegible]　芋
所し家も篆鈴あつい寄けて　桑
走るを秋[illegible]まり　はす月　芋
別まゆく家も家くさ然き人ゝ　桑
[illegible]絶色をもさけぬ　舟貿　芋

火ともし比の咲花霧にも花の山　助宣
きへ口捻ふ鹿の是せけり　禾木
薬の郭さる通ふ宮明て　令
菜種つくらぬ白子小紫雑　宣
杉の木乃精か月の山霧かゝり　令
むし鳴て霧に吉広り枇く　木
地蔵まへ夜の枕儀是にあり　宣
蕪てすみたる所に能を出に　木
ひともにぬらちて灸を焼てぬけて　宣
田舎ふ手する茄子穴とる　木

蚤や蚊のみて出所の迷惑さ　宣
唯しかまりしてかゝ恵ん　木
大津のまくらすんくる浦の月　宣
脱て乃りてうすゐもす雁　木
角力とらぬ家をきゝ来ぬもの　宣
十文銭を出しけり雲のまろ　木
氣から出る宿の一日茶前か　宣
渡んで出くる霧ゝ旅たち　木
菜の葉のぬきに所からなる秋付　令
なまねたんまはかくる綾若　宣
麓から出かけ似合ぬ不牲見　木
はかなひ出されて年足すまする　宣

ご縁のとへのかくしは岸儀　木
吉原の霧吉ちらつくとかゝる　宣
せかれし花侍るの酒法か六夜夏　木
矢来の桜とく大汐　宣
時しも降ゆくつり雨の積　木
梅見竜かけて出来る新女子　宣
自八ゝし法まし世ゝ稲探しらき　木
燃りらくれて香る裸身　宣
業化小判団五枚さらしと　木
火防の浮札宝井まさる　宣
常とぬ儒の名手紙にそする　木
からくくせ色え八来も照る　宣

多度山鉄ら世界の浮まかり　木
田畑一統権蘭ハ出すむ　宣

大棠集會

ほのゝ仏うちのふ出るる春新ゝ　禾木
行月に好ろむ漆川の青　文昇
菓子桜をまゝるゝ棲る元うるて　春魁
みくりらるれ乞ひるひ城まり　主山
浮気る実の法らひら宮まり白　荷歩
古稀生の行ゝる出す　吾六
渡哥義のとゝかるもある出来なる　青亀
未合まて愛名筋もあしは　素伯

罨法にむすびしと常にかけ　松五
奴芳よるしに生ふ雛角　古春
見ぬ子のすむまで入日菖蒲山　三枝
のりおり花の隣らし以数　柳雅
一まんぬ月の啼しこゑ四文字　昇
女女庵下て出あれ雛つけ　木
誰のかりやしゆるみ好ゑ出おし　山
錦絵母子のゆてる猫割合　騏
西画の大鼻すり花のうけ　六
善くのけてうち途き日の郷　歩
山陰にある光を少ゆる雲の妻　伯
針に度もふく衣に鷲の僧但　亀

新し深てうちふき通りの家ゝおよ　春
笛にはるゝくそうける聰　五
月さ障さ愛ふ生たるゝちにうらぬし　雅
十鉢ぬおりふ時ふくく陳中　枝
縫もの衣の袖見れもわゝ戸ゆ経すり　木
みし里よりて外見りむく　昇
けわら下しも使申ちきて去吹し　騏
縫うり出たる秋ふ紅月　山
呉竹する会点も梨子の実すき　歩
追ひ尼のおりゆる宿中　六
何見ても床しも物にしゆりかふ行来　亀
地震時ゝ見幸かゝ生まる　伯

二〻は涼しの[illegible]て　五

志や[illegible]あけ[illegible]記[illegible]　春

[illegible]まれりなけれる丸木橋　枝

よん[illegible]涼[illegible]　雅

○　由誓

すゞし[illegible]の[illegible]　夜照

[illegible]める夏の[illegible]の　誓

[illegible]未の[illegible]　照

[illegible]する　誓

[illegible]の[illegible]の月　照

[illegible]の[illegible]　誓

[illegible]　照

[illegible]の[illegible]る　誓

[illegible]の[illegible]　照

吹草[illegible]　誓

[illegible]の[illegible]　照

[illegible]する　誓

[illegible]の[illegible]　照

[illegible]　誓

[illegible]の[illegible]　照

[illegible]　誓

[illegible]　照

いく春を役者まつりの浮きたちて　令
花王のうちれる風の竿之に　聲
ちまつよ出る川原の中朝まて涼　照
引出してぬかる顔を　はくれよ　聲
菜蝶して見よ星やつく角寒ゐり　照
立かゝるゝく月の出ける　ほとん人の連　聲
こゝ見てしつ見ひきさ紀　明の数寄のし　照
手ぬ賤の書てあ　峡紅も涼　聲
緑点の宮僚をぬけて　去のひとこ　照
まかり出来脚の　照りつく　聲
木よりし月のたゝのみ　狩　畠　照
都の林見けり出くてきまんし　聲

御殿の寺らしのうく風呂の下　照
鹿来る苗ぬれ家広新供　聲
湯とけ時年の工合うちて直り　照
晩くはましに休第　来つ　楼
引出てかかり新くる　畑の茶　照
菜のうくわり菊さる花の水　聲

蕉乱

蓑掃て豆見りたる小春かな
かすみに届おかけれは菊える　埋火　松什
豪蛍包古手たてく　紅うくて　乱
繁くほうりあるうち来れき　什

何もなきみかへり六月の入しまひ　乱
風呂屋出かけてかへる秋さ　付
西院あたりこそ子安を尋ねあるく　乱
来ぬ先から婿をとつく　付
花の暁に鶏のなきける行かけ　乱
ふつゝかく中くゝみ見ゆる茶椀　付
入口の地面は寺へ掛合出し　乱
貴方すかさず筍のうり買　付
降さらす月も船はあたゝかき　乱
雲をもかくれ世の鉄菜刀　付
何がなと宝洗濯居かはりぬ　乱
闇に潮ではよくよく餘る錦　付

目にさへも気くるの花咲其の跡　乱
おかみさんの抓んは花菊入　付
またもまうす病気の手水鉢　令
こらへ更衣着替袷肩　乱
物はあれど寒いしてあれる刈後髪　付
野ら越ゆる菖蒲をよふ　乱
うしろして腰も伸さぬ尼か青子　付
水中から汲て少くさう小たらひ　乱
縁もほつくし念の掛け鞍　付
咲さへもさひゐる闇のましまう　乱
浮さへも其の絹袷はあはぬ背で　付
いまも白無垢かくる箸箱　乱

網ありまゝ際らしき月の比　什
小さゝゐる稲も出揃ふ　乱
十日あるも撲すせりり越へし　什
まゐて雨ふらぬ晩る気すれ　乱
去りとても遠月あら娘古傳子　什
次の料理ハ萩立毛まゝ　乱
闌なのなかゝる茶はり　什
都の秋りり江の寒吹ろ川　乱

三十六鴎遊戯

言葉也ふむしりつゞむ儀の旁　蒼乱
日の出るきハあし婦忘　酉邨

一丁隔小楊子ふりかけて　抱儀
大入の中に見え撰さ燗　乱
懐手へハむきし新茶の月　儀
逃けて衆りて丁の刈こまる　乱
盆きりて出来る茶古風　令
菜をくれても手の力ふりし　邨
畑板のあたりも髪も酔たかり　儀
子供さへのりの染むる日のたまり　乱
隣しく人乃ちや来る是乃書　邨
としうち見乃も目立ふし究　儀
植木屋年松のたしかき月の比　乱
茶髪の縄の鄒魔ふ出遣入　邨

さひしさも秋ハさびしき茅かり上り　儀
あさくさ橋より戌亥にあたる　乱
ちよろちよろと浪をさし込料理茶屋　郎
昼一時ハ翁らか美して　儀
あらきみのてうり蓮あつらへて　乱
以ての外なる貧の多以隠居変　郎
金毘羅へ返されし使者あらへ出る　儀
うちハ拾て来て名るなかり　乱
とりかくさゆうさもせぬ評なき記　郎
浦の気がちる他の縁持をひく　儀
前さきの彼岸半ハきれいなりと継母　乱
枯く梅の素　門口　儀

此寺ハ京しての第一成病より　儀
ころの夜もせつなき無然等閑　乱
月代をそられて寝酒あくらへて　郎
霜さいとくの本年なる水難　儀
大分の人乃出来たり西院集　乱
かりこ桐おりの紋の似合奴　郎
六勝も節句の当後ハ遠ざかり　儀
御達ふやくてひさしぶりなる　乱
晴くれもますとるありふ池の花　郎
松のたるまあくる痲なり隙花　儀

山水のきよきほとりに紀千月哉　英乱
それはまへに　ほとりにあふく　抱儀
地車のつりつる方へ成ありのけて　寿米
料紙の花の小机を紀　乱
いつもほとんとむすひのみか九月の暑く　儀
栗のかうしの実　たふたふくも　米
手前者の叢書を夫妻に御悦　乱
境内今ハ町となる毛　出牧　儀
後にひきて宿かへ得ん伝左衛門あけ　米
漆ぬる色の大造り　もれる　乱
掃除へ肉をおてる料理屋　儀
あかくしと毛をほす居丸　米

入梅ころのあまりも春の雲の月　乱
雇石はとのり人のほめけり　儀
国もおし盛を競ひし任文の語　米
年中の万歳が出て来る　乱
此獨活ハいくら茹てもそのまゝ　儀
まちしつ練りてまく行も是好　米
橘木喚のあそつて前まちり出し　乱
帯をゆるめし逢う紀綴治し　儀
すゝむほとんと信の庵ある境の像　米
手かうりいつて意きまちくえる　乱
治らや京ハ湯をつりあいつも剃り　儀
そ様もすれ識法のうゑ　米

古たはすゝめり異なる曲寒ゝ月重　乱
宿り菜なと　多以　川　猫　儀
商買の紺屋を弟らぬ中息子　雀
おし咋りも直るたし古く　乱
素吐り廿六夜の月待て　儀
ゝ作りと　あけゝ　垣の名瓜　雀
やう寒くさんし　うまる　栃　罠　乱
干つゆきふせ　蛙ゝゝ　ゆす　儀
はあらくり男剥ぬ医者の供つれて　雀
在ゝ魔りて　ふ　猪　手　京町　乱
宴を出尻菊も篠屋まてゝたき　儀
森の末にて有　妹　姐　枝　雀

筆古くのり敷縫ておよの也かきへさく　松　什
嫁菜ふ　人ゝ　春名く浦　舵　柁　儀
清まりひも梅かいふゆ家りて　笠　年
あしハ藪の先以　地　嵐　葛　乱
縁積の異作ゝる　新　新月　儀
盆の雨さらゝ　清かふ角力取　什
親子来る川魚を家内の賑ひて　乱
医者きのうえれ　ふくされ姫　村　酉郎
襷掛の中はり閉まるゝ簾上回　什
寂きさくゝ人あり　一気なくゝあり　儀

引くあらり左ては押する置火閻　郎
亡骸こゝろ月　猿猴ふ月　乱
猿りあまかふて雑穀ヶ移あらそ　儀
風俗絵の群り　出て来る　什
春菊用ふ取らり納石の納屋好　郎
都のあけさハしらし板の間　乱
吉手前の田舎へ出でる益頭　儀
見ゆる菜の菜へハ出た来奴　什
うつりき稀なあり桜笑そらし　郎
手をつく鯨をる盆の前伴　乱
底分十日雪ハ幡ハ立派すく　儀
神楽をつく町の末水　什

反ちまくられ　肺の底るそそれてせす　乱
行燈たてる　あらわす　刺刀　郎
女房か蓑丁寄しる小商人　什
ちあらの下手に合ふちようあふ　儀
禁ぎるハとりあけりほりふ蔵　末　郎
厳をも出しておかふる帆ほとり　乱
入りくへまわるハ月もなく晴て　儀
春かする　たけ祭のけるあく　什
まくまわそうちハ独娘に水を汲　乱
四五人　まわれ　家ともあくさき　郎
川つまよ信て乃あまり　縁と生は　什
莫きく　あまれ　都記をする　儀

一枚の紙衣に冬を遣して　郁
火入乃底も古寺のきゝ片　乳
蘿伐ても見られぬ梅の花　抱儀
明りさけし記室の日暮　月庵
わつかくの幌いらりも芭として　令
よう見るの露の笛る　枚の笛　儀
晴られを却て恨る宵の月　令
雲秋木の梢も露の赤く色　庵
小借あも捨餘鬼つれのころ霜　令
縁よりいつ夜照らすわす　儀

苦労してこそ土庵の操をも訂なし　庵
気ならく能かる水飄の流　儀
節分の掃除も済し庭に宿　庵
いつのまにやら毛繊煩のこゝむ　儀
自慢顔に以てゆく練りの八九反　庵
新酒くみすり酒をも捨ゝ癖　儀
御菓子蠟燭をゆる秋の燈　庵
くらう吟ゆる牽牛野鈍家　儀
見るに花もまゝ女花又羽翼の花て　庵
蓋捻の垣より初しいはゐ吹　儀
田舎の赤くゝかなれ候て霜る　令
陣操をす相の　精坐民　庵

葉かれしてあれたもの名残歟 儀
暑いはきらもなき檐すゞみ 鹿
辻うりの李で安ほえる門の類 儀
内外の使ハいうり気はつる 鹿
後すさんが さうは寺は 着 儀
鹿路 船のたよれ来る 汐 鹿
よるたびり 歩り流るゝ 沙之を 儀
藥芸蒔さ 六話の ふ筆 りまち 鹿
月よ清よるも 時雨の 飛出 儀
蘇きりちらす 霧の 生酔 鹿
露しらまうきつて一畦さねりあり 儀
ゆうり仕入る 菊の 花籠 鹿

ふ能なり皆りハ清元る 瘧やみ 儀
乱かし法のうたる手 生蘆越 鹿
寺数の廿らんの墓あうたるもして 儀
葉乃けふりはなき夕東風 鹿

植ゑてそ見し信や うへ能升 抱儀
岩めりほとして あらる 入梅 雲 梅謀
錦の似ヶ見ねて 籠 とびて 育墨
たゝくそ来さ人の 手 城うる 儀
沢文の清うれ おうむ 笠乃月 謀
吉翼の枚ち 織ふ 秋風 墨

かりかすり干綿子かへる垣のうち　儀
一の義表ハ椎縫家なり　祥
標杭ニ来てハ野の羽を休め　墨
駄ニ積る武来て虚する　儀
長者まつる宵の一興の挑燈し　祥
鮭の塩出汁鉢ニ月さしき　墨
手へたらく様のとけのぬけかゝて　儀
ちらつくと後ニ往るも悸まる　祥
年寄のすゝるまゝ糸の窯信遊　墨
出の寒さ身を更けぬ姥川見　儀
栄朝家ミ憚の法を紀のまゝ母年尺　祥
やくりきも永ひ抄もゑ八ツ過　墨

うさらしと鞘の下さ虫のむつかしゆく　儀
ふらつ能でも気なりいかぬ　祥
販売りの手なれたる家大晦日　墨
綻ぶん能縫ふ装束を重ねる　儀
物置のひまなくて庭の産なり　祥
此川隔ニ合歓の木ちりまる　墨
先換え沙汰さらも茶れ秋後の礼　儀
神酒の何かりもふかりしと飲む　祥
塵る頃をまりて按摩の抑へつき　墨
背なるも出て越の山ここえ　儀
月は傍くり夜ゑの位するに出羽　祥
うつてかまへてく秋乃照む　墨

秋寒し紋あらんさ墓ある水むけて　儀
玉髪一まはりとさへ転るよもち髪　禄
かの便りも貴の為めはふつさりと　墨
見えずなるせいらり濁の細るなり　儀
あらうさ寄て庵九をきまふ行ありし　禄
はらけ姑くれなりつかむ藪の芽　墨

あそはかり錦を指もて掃はる　杦儀
東海の冬まりのまぬる庭合　相堂
塩の鮮る柳しし葉漬にゐ除して　月庵
辭道しれて通る大工よみむ　儀

自過て襟掃青も赤やかしと　堂
天気よし涼の飛けれ緑が夜　庵
涼ふさも如くぬ鏡の腥き　儀
扉風のうちへはなすぬ栄すて　堂
手拭くして遊ぶ趣向の川東　庵
きんさ時分なり時つくる鶏　儀
蓮の葉よ濁江の底の明りかな　堂
入日の照て棟所あるく紀　儀
けふ梅はまるはさしれ月の蝶　庵
蛙の称荷を気なり出すす　堂
庵て影さあちはひなる霧し空　庵
蝶けす鶴の利ぞ姑き[illegible]　儀

萩ハまだ是ほど咲すそへの花見　堂
常こゝろしもまひおもぬ夢　庵
手あふりて細口きゝにあつかさ　儀
節所にも陽きる代継　堂
伊勢縁に清かしくぬ直段あり　庵
土産ふらみたて暑くも移る　儀
来いのハ昔ひ営する冬桂　堂
古葉重く出て合進たへる　庵
材木も先渡山ふ落書夢待　儀
さりしと津しく網壺汲とまる　堂
野の末に徒ハたつしてゆめなし　庵
如月詣の乱ち廿の小雨くる　儀

弁天の森をきつてき青の月　堂
時の糸ゝんの別ふ西陽　庵
栗柿能きかりハ茎もりかしく　儀
雑費の多筆川越の市　堂
門口乃日御申刻よあれ乃あさき　庵
菊乃ゆく気て舟なお出きとる　儀
蓬ぬ宮のまええさつきり祭の帰き　堂
菜の梅ほし哉茂き宮ちる花　庵

閑関

葦よ居の鎖からえ吉門の内いらまかりけまし かふやのし
かくし 世於井をくまくまかさるる 清操ハらいたて ねをさ
發くくも あらし 志おんてえ 彩をせりきれらし城をてみくる
よすかるもとくくをおん以をるりまとらいらへとも五乃
かん あ鉄あやつりきひし上りの味ひをきも早郷よくむし
まきとものの精さしの湖られも重り汗して我家の
清さあ系をあらくはつりありかくいらつらりま
はり秋来りて耳陸ふて吹ふ年の坂を廿ちうく又ま
新ふし記をかり追ふ…るさえれ 停まひくるいまり

扉にも暖於出のけし柏菜於ふりかくりてめをまさし
庭の松枝弟をおれるるのを多もあきとたあり家らくら
ありうらて系俳しちの元をする佳家をへ終の香
我らゆふし合掌又余しも祈念せらく行されりし云ふ
佳將の法よりをよ弟出るる妙の色常我すし免らけらふ乃
いひらひ本道をく転ありあら牛傳への系りあ起 天地の
発をみよ 代育さらうく手の出於つらく衣食住の云八
をさあらりつるし者ろしは家ありる急春おりまそ師なし
いくとも家へ於天命をうちてらせてをみまり門を戸隠し
世の変り我たちて人のらかあありの年我後へん師走
孫らたらは芭蕉翁の友あ親をとあらし多り弟子を
篤りとさらさしあく代者て親て吉毛をちく生涼く

たまさめたる意のまゝ大方方法選り紙にしるして小
ゐなる古人の發句をならし並べて甲乙批評し給ひて
後の世話のよみ草とは成りぬ

天保八年といふとしの二月日

古納 一具

春之部 發句

歳旦

春の来る門にや関ハなかりけり　桐雨

ちとせふむ浅みさゝねさゞれ鳥　丁出

あら玉の峰に一声てありけり　風ノ郎

ちる花やたゞ秋知りし鴫の背　其楳

元日も由利(?)ハあつけ置の来る　氷石

ねのまつも花も使も松のさかり　洒入

○

鶯の初音も昔の恵方かな　呼牛

はつ夢もつもる戸たての来る和歌哉　杜鷲

さゞなみや雛鶯のすむ花かな　秀嶺

明しはのはこりかなしや松の内　逸渕
手毬の音て転る也ふりぬる　一炎
あれ出しこそめてたき手まり哉　波錢
雑に生き扶持先や毛つくる手まり哉　流芝
春雨や羽子の音にもうつし角　耕雪女
春風をあしらふ羽子の行衛哉　市丹
下手也生流るゝ男ふり　律女
まつる春の大空高や春の音ん　雀叟
さし傳や清水の香ぐる櫻ふらふ　勝孫
流つれて篝火見えし春の花　一眉
あつ雁葉影の見えて春なかり　惟草
ち寵の扇子やる箏世帯　加本　護物

椿

飛こして椿を寒しる小流哉　其肉
折とはちや何の家見ても椿垣　一棲
まとりつきの本のおなありて椿の花　六々
童出の花の赤き也宇治乃ちよ　うつゝ
降りもして寡さきえ椿つりはの色ひ　由誓
椿のけてゆるり田子に降る細なり　六英
こえ咲くと見事咲ゆるや吹ちらり　このみ良
咲まゝの花也頃まし椿の花　嵐翁
つらら立津るや椿の葉河岸　鷹岩
ぬ折とゆきちすねかり椿かなひ　餃雪
春かまくらり手な椿命に古りなり　一兆

折つら折青きと柳とまつれたる　曾見

柳

青むすくへ志らぬ娘や柳のちから　朝陽

青柳世身に儀の取まはし　之九

さき逢の律るしさ系に夕柳　蔭了

暖みす一まちあるや堂前平牧　白外

柳まへ也ちくにかゝる夕かりな　幻芝

戸口から見ても柳の動きかり　不静

宗鑑　飛鳥

黄鳥や多貴地のある花の風　黄山

うくひすや庭の庭子もなかなかる　秋香

鶯や垣をも出ぬ先　偶内川　里雀

宗鑑かぬやいへ来りもきまり　北洋

鶯や椿の一ツ葉にありうちけり　丁出

うちはすりて乾いたら何もなし　たか女

芳乃色たゆる宇のも花しや　暮笛

鶯や礒のかさむく朝の声　里見女

花　鳥之部

茶の花あかりて名にし池ありし　一具

あかりと花の宗との花の茶の家　禾木

茶の家の茶の花に折りぬ　茶静

茶の家の一舟の滝の茶とこれけり　鳥義

ちかよりをもちやちりて花のもち　流芝

出かけて安かをうけりや宇の郷盃　白紀

暮の山遠くへのいて小鳥哉　白蟻

大名咲て外のけ称しぬやうすけり　亥子

田のりくつる蛙ひゝの音しけ成の上　鷄年

立ひ来のくるりと障子ゟ蕣の露　草紬

葉ゟ都しの飛もある店の槇可風　木道

ちりとやすき桜や風鈴いそろしまくへ　小圓

花守けん手の内なうや花さかり　松什

大名の雨濁を立てゝ啼千鳥　蘆了

歌あふへて

海道出てうけすむや新蕎麦　秀文

手よ入のいや字の影をうつす滞　濱吉

宝の泉へ涌や天のましと　道等

東稲ひしてはよりうり男猫　曉堂

松をちさと吹をしる騒子ゟ　石洞

のさとはのわ行や赤蔭の水溜り　壯覚

振よの色蓑は振るふ霊中まで　育節

月よ宵町の砧はいれたる　宇弘

庭の木乃葉吹明も桜元ゟ　醉車

来ぬ楽や頭指子たゝは弦鳴　桐雨

冷よりかつきりて又もおぼろ　梅窓

両月ハ童吹てもあれはせ　東明

東子うけて蔦になの花消ゟ月　蒸頃

あさきのり姉より寄し蝶来哉　梅令
石頭乃つくん比すゝぬ舞子の出立　夜照
ゆふくゝ蜜柑ひろりけり秋雨　真澄
花つゝみて笑うち来の里　喜楽
野くりほくゝかふきく桜草　西馬
刈安のけふも紀藤也舞子の声　蒼虬
芽人やのしさんすり子はのこゝろ　永保
芝居の藤の家はふりや舞子の声　慈竟
ゆつくりと秋も藤をお猿こそ家　心阿
振返つて牛の和らぎ也を飛すきを　千瑞
手つくつく涼しさ中の枝来る外の　一為
生田よりきてくるす藤乃草　涼菊

来鈴雪霏ゝ寄りを晴くり寄り　牧之
二人しては乱とる也月照して　文山
親蜂や出たさめて葉に居る　南甫
出ぬうちの涼しき藤を来たる男かな　沙来
幕紙や雑とく入ゝりけふは料　雪紫
水雀笛にふけ見ひそり水中に　一鳳
菰し角番にも飛をする形なき　桐堂
雲路の雲光ゝ也きく影ゝ蚤　常岩
餘情也ゆふを雲の飛とうき人　可考
出来ぬ人の身ゆりあゆりゆり　如斗
嬉しさする酔て時雨にあをらく人　小園
見る人しけ向来るも涼蛙　圭布

菊の香のこゝろ咲せて秋や落し角　〆々
拵子晴やかくし場をハ秋のあさる　閑志
氷文り紙ども寺うゝるさん館ふ風　志ん丈
日もよ庵ゝ氷く悲けり人の香り　芦角
雨の香り孫も菊の香あるの江　月高
菊ふの花のうゝ庵て蘇生まりり　西窠
菊ゝゝはゝゝ菊しのきつゝゝ懐ふ風　也皇
右の中の香抜ゝゝ人来たる日永風　太拳
秋ふ香も旋りの香ゝ花み上秋きぬ　露泉
籠持て蓮鞠菊ふて庵り氣李　乙人
菊入や水路えて衛草ゝ出る　西山
雲の後の出発年とき湖ゝ栞　茎水

高麗寄の出来る麻も高くのりけり　奇嶂
足角ゝの月たゝ手先毎寄ふ江　蕉水
海の香り去ゝの汲干の舟乃書　大枝
たゝま人と懐出て竹ゝ庵蕎ゝ風　露玉
軍鶏の為の足ふ拓木の芽ゝ系　山骨
一余告してゝ是去年ふ千銭ゝ事　素亭
私ゆゝ香の色内国の右抜の雨　護物
喰蛙以てゝ出てゝ去ゝま秋り称あん像　真齊
右る風の御ゝ出ん手折り見ゆりけ水　槐堂
大風てはゝゝしなゝる粧ゝの郡　六才 秀水
遠かゝしと人てかゝとゝる庵し角　丁臺
去年くのゝ武蔵をゝる色桜柳　朝翠

夏之部

首夏

水きハ青の穿えて青葉かな　芳人

古簾をまくるや西川の流れけり　嵐鐘

仕立居の乃ちらへ出る若葉かな　蒿孫

糸さる乃紬のうちのさらへ出る衣　江月

絽衣のあけのこゝろけりきすゝ袷　筌吏

都のえもよりまきまんとく　惟草

杜鵑

ほとゝぎす人まつ出ぬ手紙　壮賛

またまた鳴ハ出来ぬ月　山馬

あゝ先ハ西行まつ何ゝ和歌　都索

さらぬとし亡き魂之ほとゝぎす　大蛤

野の宮は何なる月の澄ぬ声　蓮月

手紙　情　時雨も書け付る　丈翠

初音聞く嵐の縄のさきにかけて　素考

草の月や只けまて作し杜宇　孤月

鸞我ゆふくれの晩し郭公　松什

歎ありす

浜風の音あらし庭やかゝら杜　楼通

葎や沼の溜り哉　咲ふさく　一兆

ころも我や汗も以前まゐらぬ　英山

一二丁表ゝ譚ある杜舟か那　月居
いとし気惠ある弟子の粉し廢かな　之蔦
何事も写す僧の知らぬ身かな　若沚
法くまつ打る紙手余光の浮ん風　杵承
氏神の祭りのあとや古扇　左古
平附たり猿舎教する指廿歳　南甫
うれしさに咲や捆内のあすの水　竹好
本舟さき中ひの先あり打子　帯犬
飛浮くる指く前日の光門国の香　白亀
業苑の光浮咲れ志角仔し　禾木
呉あしても種きせる譚の香　菖古
雲の峰妻手も見えて春秋かな　史凉

あさくの句のあらし白絵のみ盛りの香　暁
春つかけ指てむかや秋東白光　松翠
春秋や志あかみ節目の人生あるまま　正佾
出藺の小花九なりしる蔵け井　大梅
花あふかうしん手々わか駿河の香　節之
思ひあり中てらとかるくる咲寺野　立糸
夢はなゝ出ても落しけて別ん夜のり　淂所
紫舟や瀬も咲ゆる絵くり濃　小直
縁まつ折て咲し露の野　柳嶋
是る之香村の山ゝ月かな花浄堂　畦李
出る身春ら所目出る咲身の香　阜池
菌寺の夜家し志あり也和の下　青蝶

降出すといはぬ計りとくもりけり　可全
蜻蛉やしめしてかへりは先に出ぬ　雪鳥
麦の穂のゆれてくるや門の前　芳英
手ぬれ花月かはらず古よりちりもなし　茶山（万里更）
卯の花や夕月影に入る雨　雨聲
うすき雲雨の月やかくれ行　得華
麻の人もと起して見るに京藤風　桂花
萩が子の来るや葉の花むさし　蘭州
蛍の灯に遠き月の夜の暮の　元風
夕立や白雨すがりて出るふ人福　小園
蝶来るやむかしひとつに縄すあれ　鱗秀
花種まきるたびに猶ぬく庭の声　蓮阿

通し矢の拗て花咲ぬのうけりけり　茶顆
其ぎりにあらぬ雨中の懐旧事　悠々
庭先や啼き緒と桜八東の永鶏　烏葉
降そそぐ緑ぬれるに水や西公の花　石膽
見ずりとりての嘆しても笛　芸隆
山の端や月かかるはいふや夜の月　琬市
松風は何に吹かれて峯　松荘
春雨の身にそへて流れ木の間　春躬
川隠れ乃ぶちり上るや霜み鷺　因浮
鳥鳴く啼や二株のかんむる　五株
出かけて見ゆのろく来ぬやまあし　呼牛
丘の上に名月見に来る時雨かな　寄之

むかうへ人を流るのかりけりし子　南々

菜のはな牡丹ともまの史らし　五渡

芥の事も行きは十しなる咲なかん　几人

能き者もう出羽花種の掃除哉　甚年

呼子鳥下を明け出る清在る　徐全

踊り来るも風外中も潜戸の遠音　可大

明ぬるのつひ明まかに船川うち　石應

灌佛やふ郎ハ志ら燕這入口　雨郎

芥翁して盈まあけるかり角櫓　眉山

清くしけハ摘さ跳まや嘯水鶏　梅岳

うるさく田毛のくさん風のふ手まかり　宇喬

夜来豆もひさく見ゆる出る出　也雄

五月雨や掃除手がかる蓑笠　今

此ころれやとんとうまけ除の蝶　つく胡

乙なすり風情付けたり桐の花　貞枝

幸風して出お比達たり冷川丘　耕雲

螢火や光て廻り涼出れ　奉泉

夕立世なり明かりもあふ蛙宿　巨桂

夜氷見つあふ張まなうきさかり　啄蘇

鵜飼ハなくさ伝来り嘯水鶏　峰路

らうそくを米うふ蛍や蠟燭の火　振盛

門田八郎色なり本川木立　獨川

井の子や埜母とのたも蛙あり　稲居

影あり鈴の響きの志まる声　枝月

のゝ曲附何本丈ある雪庭かな　抱一

秋風や岩にそうても竹の音　孤来

日の本に出る月や加んむとり　叢

清水茶見て行ゆやま掛の月うつを　抱絲

加茂月の水もよどまぬ夜半哉　月邨

おん老の觴まで寿て井戸掛けり　惟州

青海苔の常もおかつる春や加那　小圃

掃除してまた乞食来ぬ庭の春　仙厄

夏水清さも一睡する町　護物

わらべの虎を見たる絵に　小圃

はりまの浦より我は出たる中に達ては猫の手をかし鯛は車あるてとりしまき虎は喉する音もせず風の吹くし首をふるを聞しるそれあるは子供のまはりを我もむ此方のうちまきの白き紀の国にて猫を張るよりとおそひ鯛を飛ばす達磨は森のさんと見てお然へりきぬる何ゆへにまた身をさまのし歩き袂かえめて猫人より毛をむいて天然より風をさまし虎に乎神の如きに首すくめる猫見ても兄かんたまを理きき来ぬきたるよ紀国なる子のまさ猫も扶

さりとは扉風の画哉ましくいの為てたゝきゝみ
まちむさ女も恋しく思ふまゝし蒙ちき禄除を寝
ものしりもし姿あるや勇ある行者は拳をうまくぬる
形ちの気色にうつくしき楚人をわれたてあるは施天もし
玉くる親王縁をまはり今もくもう嘴しあしく御くし虎の
法師蛾とつきしつたなくあらきぎえり其後彼の振り蔵
を借たまへ香らいやとて首蛾ふるをうちいで蛾本のかさま
女法ちりあしけるものとまり松は見えしうちたまへ其れ
かくされ松をなりし化香の形手もかくいはんつゐまるの
きしい桃ちよあつても松うちもとい忍しらいの安きりり
まへなのものちゃみあらんよりえたゝみあらさるまり
けりけむ光この室気らし

秋之部 発句

立秋

昔より思ふまゝ松東のうちに入るの秋　得黄

ちり秋や混るれのあまたに洗ひ松　樗月

秋たつや[illegible]つゞまる人々　寿化

松陰しより[illegible]葉の味れせけさ秋　一具

連のあん寺子もはしめたちのいろ　林價

うしろむく鷺のまなこや都の秋　抱儀

一二寸清水もかへてまさき秋　蒼虬

秋たりや丈もあるくの親子[illegible]　桐雨

月

月の菴葉ちる音の聞えけり　一株

麻ふくる床のかたすみやこの月　府尺

此酔の詩を吟はん月夜哉　枚宜

菜鉢にかゝる[illegible]月　吟宴

名月やたのまるゝ松乃影をかへ　月貸

手さきみの音や月に[illegible]の内　閑那

初月や[illegible]柱　西馬

名月や人よりまさる櫓の音　玄子

有明[illegible]　由誓

[illegible]先波穿の清ミかな　氷梅

[illegible]の加茂月見哉　松堂

手ばなせは珠ふたつ月見かな　一芝

[illegible]の割出月の名残かな　碧水

[illegible]月の名残二つかな　玉芝

いさよひや[illegible]人も寄　関々

名月や[illegible]たもり　太老

かゝる夜も[illegible]の月　沙鶴

題しらず

みちる[illegible]桐一葉　林曹

竹と[illegible]卯子の本　資吉

[illegible]気のたるむ　阿竹

蔓草のまんなかかへむ[illegible]　鳳朗

倒れても毛虫て同じ向きなる　傳石

芽の出て寸も見えぬ佛の秋　蕪池

出ぬまゝに穂の出来る芒かな　世岐

刀祢海村

伺の月きのふも夕日は灯台の尾　馬吏

水際ありうけのもれも野菜かな　吐山

黄な菊は寸分もなき葉の花　凤也

蕎麦くらひ名屋ありあくまぬかのかな　舎用

濱や鶴の足跡にしみ尽きて月　草季

老ヶ手乃ある寸しや章紀度かな　石勝

一日の来の出あり蕎麦の窓　雲老

鶉も見えて岸あへ尾分けて　湖山

咲きある貝母の夕や愛しく　太橘

稲つかぬ鶉あひ来るやかぬかしき　西里

かる堀へ芋の以来も寂見ゐる　松雨

一稲来る稲刈ちあは寸小楼かな　北秀

出立ちの落日さへつゝね隣かな　奉泉

舟ぞ来し東見ゆる芋の露　太笛

雨露の果やかゝる茅屋の秋　蕪白

見ぬ間に作て置く露すまかり　和我

新月も茎の寒さの秋の水　斗遊

鳥も栖し菊は老いての月夜し　洞天

尾花の末でひねって鶉ありき　豊也

雀も足に旭まで吹し露の中　一具

道の火を仕舞ふてたつや川の霧　竹濱

表茶の香とぞ知らぬ天の川　豊馬

雨二日精殺して晴れ寒り　一棲

あり明けのあふ萩のなきさかな　丞旅

潮まりのくへるも荷るや秋のかぜ　魚鳴

鉄砲のけさ井戸あたりまりて哉　逸渕

まれのうら涼しさや秋の床しく　麟芝

菜一把むしてゆくや清の水　田川

又来ても菜あるなと角入気季　廣要

負しさ戦俸ふ人玄の轡篭かな　木葉

稲ほのさらる払資弁を搾りけり　阿川

打秋风し見さへあるた桔梗哉　兀人

井戸ばたも野分の名残志ぐれ女郎花　蔦記

葉のかげ志ぐれふるや花畑　友之

酒藏て夕めしふるさとかな　永保

かくしハ見へし並びけり　一珠

惜みけりのさゝらとまでもうつりかね　損女

より加ゝる桔梗のころありきかな　松什

風も秋七夕しかさきくとりの時かな　若兆

萍や水たゝく浦ふ船出の河かな　立角

高まりて見上けてあふ木の子かな　雨郎

町へ来る傍りのさかさ木ばかり哉　舟久

菜をたくのけてくる菜も刈畑かな　抱傑

大木の中ばかり枝也そりめかな　棠切

葎也小ぐら乃花の咲津るひ　菊光

幽さ花ふ先ち一の花あさ花散る　有月

浮雲の晴さ青くも見へしも　方居

也麓あり牡丹の戸行の見つけり　氷狐

月のあとの宵の積りあき木の実　賓吉

鯉抱さ人もし見る一村一の那　扇和

花ふりそ見れてあるやまた花　文玉

あかう墓結ふ菊つ見や蝶九花　胤月

うら波やまた葎の水をすゝき　壺年

夜も夜とて水の音ふ菜の花　また咲き

咲あきの木也重素の聞りしに　梅ゑ

声待らのかよ白も身に都乃菜　左谷

涼るの光ち浪あるふ小乃まで　青芙

来さらあゝさ乃小川の峰の見ゆる芝ら宿　蓬宇

雌しさに蝶入わた錦陀花　方舟

月ほりの梅やや小りの鷲の陰と　丘仙

一人晴やほそ縁るよのいのち　一耕

友ゑもてなあれは花さく志ま舞　春斉

山野やや咲も志まうし筆を見れ　抱芝

更科何き如き錦あく　姫山

蓬の[illegible]見えて花の咲をらり　葛山

落栗や鳴処の乞りも寒月寂　汝路

冬近し菊を懐き葎の寸　芹芝

哀露き不知人き九月九日夕ぶ　大魯

てりもせずかくれし九月のみかつきかな　由誓
色ことに染し櫻紅葉九月尽　一様
おもひ出はちとせの色を行く事　一具
芭蕉葉をうちゆけは雛まつるらん　千頴
萩もあらし清て涼の葉の子風　四明
笑く数は地や常の世に留守持ちて居る　一兆
手向ぬ日の宗の寺や菓の実　助宣
稲すり絶え年間の小鶴立　くめ女
草の戸も冬こそ寒き行かり　来丸
のこしたる花の霜冬ふとり朝霜か事　都嘉女
年くれや暖かにまつ冬の菜畠　湖山

冬之部発句

雪

外の夜はついの底なり傍表　若洲
月夜あかん葉に打まる都の雪　暁雪
雪ちりふり開ゆる雪も花者梅　万巌
寺の先は葉をくしみ雪の朝やかなし　花角
雪の都なる人の通り氣なき　一揆
戸はある一ツ腰ぬへく上雪なる雪　水竹
雪の門折て紙燭の行つかう事　由誓
梯の木に長しき雪かたも丸け　芝石
陽さらす小高き雪の洪く紅　菓陋
山の雪奥深き禅堂の中ずまなり　第見

野ら菜畑とのりを雪の降りかかり　寸風
雪の竹の朝ひらひらと小窓の原　千鱗
年切りたらも可出也そ九け　良台
出しるかや気の哀しきの海舟　山馬

題しらす

原出る日如月代なる鶯　而后
殺しける気性なおしく萩の原　茂稚
下々水摘拾て付て上りけり　青坡
霜と霰の煮立ちきつらひけり　青可
おそ鳥来る木の子なる也　桃杷の宿　稲白
海り紙具る棚の梅か郷　翠川

ちとり塒も冬遠入る巨燵哉　荷重
掛あらしるも明け十夜哉　蕉夢
深切ハあたり余りて河や納豆汁　出丈
枯果し蓮の根掘る鳥の聲　雪叟
朝よさの時雨るるたよりや冬木立　千崖
松まも来たるや冴ゆ海の棲所より　駒蛍
深く加ら雪に落す千や　冬枯　儀丘
大根引一節見もふり記り　比古
吹とその木枯も葉も浮々し道　之桂
十夜や下手も道さ枯るる　松の月　河石
指すくや砕しきも雪しさ文むかく家　喜圃
落を加ら梢我もあ木枯る風　蕉晃

蒼哉尤ふかし庵花ふらんかな　巍山

月ちる影の枝先らや沙の木の葉哉　太堯

一本の木も舞ひ落し落葉かな　閑斎

影の宮も一筋出る枯野かな　黄虬

寒さ迄も信じや寂しさの海の花　文劉

春雨や人の通ふや冬の原　葛山

新らしき尤たつてと七草かな　山谷

炭焼の絵仕る哉　蘭牙

雪しらまず霜のかた凍る哉　枕流

霜子の枝なる霜の朝かな　露泉

麦蒔も我やや山の細道かな　千歎

冬ましの跡ふらしまり雪しら　古眺

手代みて舟子の声の刈ふらん　一了

立ち出て誰人の行か神しく秋　松影

霰近う桂ちるや冬木立　育来

落葉して遠くきこゆる流るゝ哉　艸子

篁かゝる水ふかき淵や椿花の花　三九

月影ある畑の負腹や大根引　濾月

枯尾花の野の枯ほ波ちら生　呼牛

あさからし紀伊の里の霞ふかし　耕雲女

山鳥か降る時雨の後の月　士馬

惜しまれは子の生まれたる霜夜哉　詠帰

去程のうくいす行きの枯葉かな　県湖

来たりし人も我が杖も枯れ芽　我尭

笑のふもて降りてなくてら雅の子　倖兄
冬中かゝる平七手紙まで大根引　眉岳
ぬけて出る大根あさかさ青菜哉　五流
来る度や写人へ寺作るなりて　虚白
度きりは秋入るゝや豚の冬　西何
院内の掃さしてある時雨哉　祁六
常に見る本能寺も寒し星の夜　剣丸
山寺の様見て行く小春哉　真様
見た夜の霜まで行く地橋の下　素竹
木のしたや冬のそり雪の池の鶴　里恵女
ひえつく能ぞたりたり田の子哉　世岐

歳暮

振りへも荒れし寝る身心ぞ　由哲
行く雲の花は灯も咲けて　逸閑
結構の夜そのしめ纏植ず　直閑
人喰ひたやうり思ふやすはなひ　如閑
蝶帰りは春の背する出ちの風　稲洲
家は暦古き巻つて変化する　小園
春めいて霞の門や年の暮　千轍

跋

菊の落葉こゝらもふる小庭にも春はあれ
ば一人乃翁ましまし黙庵より旅立
出けりよしのをもとめ隅田川の
流をも友とし遊ぶ老人の
旅中より書ちらしたる一枚二枚を
四季にわたり手ぶり神なりけるを集
盛れ武江の書肆の先を行ぬるのみ哉

語りし庚申の夜なるとなりし我あるを
めでたきは萬歳の梅とまきもまくさ唄ひ
勝手よりせしく俳諧の發句連句を編し
此を我者さへもきをかへし小子史を包
より一帖我出して同好の人に便ある
さんとて所集也し我今七部既ニ
梓あり書をも得しんと追し走居
是に蕪翁へよしとろの清す子に元ありしを

其中に己名我得し處風生する我を投
母もあ我嘆きめ我り嘆野の華し我
句はなは手もとふて我を交へて行ひぬん
錄すあはこしきも楽は手矢立の墨出
用意もなきには行きめは我ぬを着まりも
いまきめてこ用意なるを紙中して書し
かゝぶ色は我をすからまにうつらく
見ては我も書あしよみえものある

かくし此書も七川氏宝銭ありて元
たれとも以ひあまりしせらひ
ちめる筆を執りしおく

丁酉秋

雪庵の
一兆

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助蔵版俳書目録

○類題之部

俳諧發句五百題	春秋庵白雄房撰	小本二冊
同 新五百題	田喜庵護物撰	中本二冊
同 新々五百題	仝撰	二冊
同 名所千題集	仝撰	三冊
同 今人東風流	洞海舎凉谷撰 一具庵一具校	二冊
同 十万句集	仝撰 仝校	四冊
同 故人五百題	松露庵撰	小本二冊
同 續故人五百題	一具庵一具撰	仝二冊

早稲田大学図書

同　類聚　八朶園寥松撰　中本二冊

同　今人五百題　八雲東溟輯　涉壁千軺校　小本二冊

此書ハ古人五百題をあつかひて宗匠方ハいふに不及初心の人の發句四季兼詠を集め當時流行一躰の見安きものにして初心生の入易き便利の書なり

同　類題　中本二冊

同　古今撰　蕪庵蟹守撰　全一冊

同　新類題　六合庵万里輯　全二冊

同　萬題集　一名題砂子　冬至庵庚年輯　八雲東溟校　全四冊

世に句集多しといへども古今をまじへたる書ハ芭蕉翁をはじめ古人數多の名家を始め當世の名家にいたるまで此集に撰び當時の風調ならびに流行一躰の見安きものにして案し方にも便利なる事まれなり此書ハ此類にこえたり

同　狹蓑集　仁比多居雁嶺輯　小本四冊

俳諧田毎の日　桃隣大人閲　全一冊

同　言笛集　錦舎素柳編　笠柄素行校　横本二冊

今人發句集　禾木園校輯　全二冊

四季發句帳

臼挽七五三　艸丸大人輯　全一冊

○假名遺物

万葉用字格　春登上人撰　全一冊

對照假字格　長野美波留大人撰　懐中折本一冊

音便假字格　春登上人撰　小本一冊

○句集之部

嵐雪句集　一称玄峰集　全二冊
其角句集　坎窩久藏撰　小本二冊
蓼太句集　全六冊
吏登句集　全一冊
巣兆句集　全一冊
完來發句集　全二冊
梅翁宗因發句集　小本二冊
太無發句集
存義發句集
獅子眠發句集

柳居發句集
糂粏瓶　甲斐艸丸集之　全一冊
葛里句集　道彦の集也　全一冊
護物七部集　小本二冊
乙二七部集　全二冊
饒舌録　元木網大人著　全二冊
三吟未來記　全一冊
俳諧寂しをり　春秋庵白雄著　全三冊
今七部集　冬至庵康年撰　全二冊
今人附合集　禾木園校輯　全四冊

芳草集　同　全二冊

芦のひとりごと　田喜庵輯　全一冊

○季寄之部

戀の栞　葎雪庵北元著　小本二冊

俳諧手挑灯　一名俳諧初心手引草　中本二冊

同　掌中小本　全一冊

俳諧袖鏡　寸珍一冊

季寄便覧　一枚摺

このしおり　横本一冊

俳諧通言　小本一冊

○文之部

新編俳諧文集　当時高名の人の文をあつむ　全一冊

俳諧變躰一覧　両面一枚摺

袖定規　表俳諧定坐変体之図　七部集その外古哲俳諧の変化付合座を定め置り今風俳諧の自在を一目に見分られるやうにしむ

俳諧礎　一折

○掌中寸珍物　編数ゝるに付今版す　集艸とかつく

掌中五百題初編　集艸初編

同　二編　集艸二編

同　三編　集艸三編
同　芭蕉發句集　集艸四編
同　其角發句集初編　集艸五編
同　二編　集艸六編
同　三編　集艸七編
同　嵐雪發句集初編　集艸八編
同　二編　集艸九編
同　乙由發句集　集艸十編
同　蓼太發句集初編　集艸十一編
同　二編　集艸十二編

同　新五百題初編　集艸十三編
同　二編　集艸十四編
同　三編　集艸十五編
同　古今撰　集艸十六編

猶追々出刻